比較的整齊なる行動を許したる等に依ると云ふことが出來る。

奉天會戰の三月九日、我第三軍の左翼師團の如きは、頑强なる敵の抵抗を排除し辛じて其の陣地を奪取するや、奉天北側地區には露軍の數縱隊雲霞の如く、蜿蜒として長蛇の列を爲し退却するを望み直ちに砲擊を開始し、其の擊滅を企圖せしも如何にせん連日十日の戰ひに砲彈は殆んど射ち盡くし、有るだけの彈丸を以てせしも射距離の關係上敵軍部隊に達せず、我が軍としては眼前に長蛇を逸したることあるを思へば、往時の退却は比較的容易なりしを推知することが出來る。

尙戰國時代の群雄は、接壤地の蠶食、領土擴張の爲め、自己の策源を中必として方線的の作戰を指導するを一般情態となしたる關係上退却（背進）は必然的の方式となれる觀がある。

一、戰略上（交戰前）退却の戰例

天正三年八月上杉謙信、能登七尾及び加賀の松任を攻略せんとするや、織田信長松任の危急を救はんとして出兵し一戰に及ばずして退却す。時人之を賢するものあり、後日信長侍臣に松任救援の行動を語り謂つて曰く「淵に躍るの小魚豈天に飛ぶの鳶の心を知らんや、昔司馬仲達が孔明を恐れたる心事と、楠正成が宇都宮公綱を避けたる心事とは、形は一にして精神は全く相反す、大將の剛愿兵の進退は衆人凡愚の知るところにあらず」と

天文十七年上杉謙信越中を平定せんとして國境に達す、越中の諸將盟約して抗戰を策す、謙信「他日機を察して討つべし」と稱して退却に決す。諸部將皆進んで討たんことを勸むれども聽かず「大手の小手」と稱して遂に退陣して居城春日山に還る。

二、誘致戰法の爲め僞騙的退却行動

古來の戰法として退却行動を以て敵を僞騙し、或は伏兵を設け、或は誘致し或は牽制して、敵に反擊を加へんとする一種の術策に利用したることあり。之れ蓋し前述追擊戰法と併せ考察する必要がある。道灌流戰法に「馳突闘入するは「破敵」と云ふ之れ血氣の勇なり、之れに應ずるの法は奇兵を以て掩擊、輕戰の後速かに退き、更に正兵を以て第二の勝を制すべし」と、卽ち奇兵は退却を常として敵を誘致したる退却戰闘は、屢々實施せられたのである。

最近獨「ソ」戰夏季交戰「ハリコフ」殲滅戰の誘致戰法の戰例（昭和一七、五）

一、「ソ」聯軍三十ヶ師團の全滅戰

「ハリコフ」（南部ロシア、ウクライナ地區）附近に、本年最初の獨「ソ」戰は「ソ」聯南部方面總司令官「チモシエンコ」元帥軍が、攻勢を開始し、冬季の間に奪還した「ハリコフ」附近の地區を足場に、北と南の兩方面より「ハリコフ」を包圍し其の奪回を企だてた。其の攻擊部署は、北方赤軍步兵二十八師團、騎兵二十個師團、戰車十六旅團、南方赤軍步兵十師團、騎兵四師團、戰車十旅團を擁して「イジュム」を起點とし北方軍は「ハリコフ」を南方軍は「クラスノグラード」を目標とし五

月十二日を期し、南北一齊に總進擊を開始した。「チ」元帥としては、獨軍の意表に出づる心算であり、冬季の間に「ムルマンスク」港(北極洋に面する港)を經由して輸入した英國製の三十六トン戰車などを多數に揃へ、機械化兵力に於ても一氣に「ハリコフ」奪還の可能性を確信してゐた。

事實開戰當初北方に於ても南方でも獨軍は退却態勢をとらざるを得ざるに至つた。北方に於ては獨の一部隊は主力を交代するため赤軍に包圍されて孤立し、南方では「ハリコフ」の前面三十キロの地點にまで赤軍の第一線は近迫し獨軍の形勢甚だ悲境であつた。

當時の「ソ」聯及び英側の報道が、狂喜に近いまでに「ソ」軍の前進振りを大々的に宣傳してゐたに呼應したやうに、不思議にも獨側の宣傳中隊の從軍報告も、この敵國の宣傳に歩調を合せた如く、獨軍が敵の大兵力に押されて已むなく苦戰中であると發表した。

かうした獨軍の作戰は、政略と宣傳の巧なる連絡を示すもので獨軍の表面上の退却もそれを承認するが如き戰況報告も、凡て戰略上の必要から生じたる一手段に過ぎなかつた。

「ボック」元帥の指揮する獨南方軍參謀部は此時祕かに、戰線の南方に控置されてゐた「クライスト」大將麾下の戰車師團に出動を命じてゐたのである。

之の「クライスト」部隊こそ、赤軍の退路遮斷竝に包圍の環を結ぶ最重要な任務を帶びたもので、この戰車兵團が目的を達するまでは、正面の獨軍は北へ或は西へ徐々に後退しつ赤軍をまず〳〵袋の奥深く誘致すると云ふ戰法であつた。

十七日突如として現はれた「クライスト」兵團は、「クラマトルスク」方面より赤軍の咽喉部に突き込み、「ドネツ」河に添ふて北上し二日後には「イジューム」を占領し三日目には北方より轉向して友軍と握手し即ち二十一日には包圍の鐶を完全に締め上げた。此の時袋の中の赤軍は尙も退路を遮斷されたことを知らず、北方へ或は西方へと調子に乘つて頗りに前進を續けてゐた。

かくて獨全軍に一齊反擊命令は下り、今まで退却態勢の獨各部隊は蘇つた如く包圍圈の中心へ向つて四方八方から猛烈に反擊を始め忽ちの内に敵の大軍を全く小さな袋の中に閉ぢこめて、俘虜だけでも二十四萬人死傷者は無限約四十師團が全滅したのである。(朝日特派員報)

三、交戰後に於ける退却戰鬪

兩軍堂々の展開を終り戰鬪部署につき、互に鋒刃を交へ決戰に陷りたる後に於ける退却換言せば、敵に强要せられ或る程度壓倒せられて行ふ退却即ち敗退の現象は、往古より名將の戰歷としては稀である。之れ往時殲滅戰の指導せられたる關係上、兩軍火花を散らし屍山血河を履み越へて雌雄を決し、最後迄戰ふを常としたからである。

然しながら作戰目的によりては、名將と雖決戰中適宜戰鬪を斷念し戰場を離脱し再擧を企圖せしこと又稀でない。例へば楠公の笠置の行在所に於て奏上するところを觀るに「勝敗は兵家の常な

り、一敗以て動かすべからず、陛下苟も正成未だ死せずと聞き給はば則ち復宸慮を勞し給ふことなきを」と、之れ楠公人に先んじて大義を唱へ天下に勤王の士を募らんとする爲には、先づ持久戰を主とし賊軍を消耗戰に倦ましむるを必要としたからである。

又秀吉長久手の合戰も、必しも家康と乾坤一擲の決戰を指導するの必要なく、家康を自己の藥籠中の者たらしむれば、秀吉として天下掌握の目的を達し得るのであるから、適宜戰鬪を離脱して後圖を策するの擧に出でたものである。

四、退却の時機

現代戰の如く火器の發達しある爲め、退却の時機は狀況、企圖、地形等により決定するが狀況許せば夜暗を利用せよ(作令二の二二四)とあるが、往昔は晝間あり夜間ありて、必しも夜間退却を本則とは心得てゐないで、一に狀況に合する退却時機を選定したやうである。之れ火器進歩せず且退却の多くが隨意の意志に出たる場合が多かつた爲であらう。

之を要するに科學、兵器の異常なる發達を遂げたる現代戰に於ては往昔の如く、退却指導の困難なると、國軍の傳統上爲し得ざるは勿論であるが、特別任務を有する作戰部隊にありては、柔軟性を有する機動部隊としての活動に、遺憾なからしむる爲め、往昔の軍隊の如く進退の輕易なることも亦必要なるのみならず、縱ひ退却を實行するに於ても往昔の如く、形而上下に亘る鞏固なる團結をもち、絶對的指揮官を核心とし、其の掌握中にありて一絲亂れざる行動をなし得る如き軍隊は又必要である。

五、往昔に於ける「退却攻勢」の觀察

退却中の軍隊が、決然として反轉し攻勢動作に轉換し、勝ち誇つて追擊中の敵の主動權を奪回せんとする所謂退却攻勢の成功したる戰例は古來珍らしからずと雖も、其の成功の條件としては、敵の不利なる狀態特に大なる過失に乘じたること、及び軍隊の精鋭なりしこと特に首將の英明果斷なりしことが附け加へられてゐる。

作令一の一七一にある「後衞は非常の場合に於ては全隊の爲犧牲となり以て本隊の退却を容易ならしむ」の原則により、後衞が奮然として立ち向ふ攻擊動作は一種の持久戰であつて、眞の「退却攻勢」と云ひ得ないのである。

例へば、信玄が信州海野口に平賀源心を擊滅したる時、信玄の後衞隊長は平賀軍の警戒虛なるに乘じ、斷乎として反轉攻勢を行ひ逆に敵を擊滅したるものにして、これは後衞の持久戰ではなく一種の退却攻勢である。

戸次川の合戰に(九州役)島津家久の退却攻勢は、顯著なる一戰例で敵軍(仙石、長曾我部、十河)の衆心一致しあらざりしと、仙石部隊の猪突暴進せると、戸次川の障碍により敵の分離しあるを看破

せし家久の慧眼達誠に依り、果敢なる反轉攻勢を行ひ成功したるものにして畢竟首將の英明により達成せられた。

元寇の役蒙古軍に對する退却攻勢

文永の役警固附近に於ける菊池武房の、蒙古軍に對する反擊は、後衞の陽擊掩護と見るべきが如きも、當時に於ける武房の意志は、飽くまで敵を壓倒殲滅せんとするにありとせば一種の退却攻勢と見るを至當とせん、蓋し敵は只だ衆を擁する烏合の追擊で何等の統制なき缺點を冒しあるを看破し之に乘じたるものである。

要するに退却攻勢の成功の爲には、敵の過失に乘ずること及び其の軍隊の精練特に首將の英明なることが重要なる要件である。故に猥りに退却中の軍隊が反轉して敵を攻擊するが如きは大に誡めある所である（作令二の二二一）「退却戰鬪指導の要は速かに敵と離隔するにあり」と明示されある通りである。

然れども一軍の將帥としては、任務、狀況上差支なく、好機を發見せば、退却間一部隊或は全力を以て斷然退却攻勢を斷乎し勝利を制し得るの英明を必要とす。

第六章　補給機關

第一節　糧秣補給

一、往昔の軍隊は、軍隊輜重的の後方機關を有すること稀で、携帶糧秣に類するものは「兵糧」として各自携帶したるに過ぎない。從て給養の補給は「糧を敵に依る」の主義を以て現地調辨を主とせるものゝ如し。

而して其の調辨法は購買徵發により、成るべく今日の所謂「官憲徵發」に努め、部隊徵發は出來得る限り之を避け、特に掠奪は「亂取り」と稱して極力嚴禁し軍紀の維持緊肅を圖つた。

又必要に應じ地方人夫をして、後方策源基地より小荷駄として輸送せしめたものである。

戰國時代に及んで兵禍連年、民力疲弊し、隨所に糧秣の調達容易ならざるに至り特に大兵團の給養に於て一層困難となつた。又掠奪は軍律を紊り且敵に虛隙を與へ、戰備の充實を缺き、且資源を亂費し經濟を亂し、民衆の信望を失ひ、從つて善政を布く所以でないので戰爭目的達成に大なる支障を來すに至りたるを以て、一層至嚴に禁止するに至つた。そこで必要に迫られて編成された小荷駄部隊は第一に武田、上杉兩軍により創設せられ、武田軍の小荷駄奉行甘利及び内藤昌豐の運用、或

は越軍の大荷駄、小荷駄奉行甘粕の指揮振りは有名なもので其の輸送區分も、大小荷駄を狀況により分進せしめ其の給養、補給に遺漏なからしめたものである。斯くて群雄之に倣ひ後方機關制漸く整備するに至り、通常之を軍隊に追隨せしむるに至れり。

而て小荷駄は、現代の大小行李や、輜重の如く尨大なものでなく糧秣を主體とし、僅少の築營材料、並に若干の豫備兵器類を携行したるに過ぎず而かも、自國領外遠く出でて作戰する場合に、多く之を運用し、自國内では特に設くることなく主として現地調辨を例としたものゝ如し。

其の他衞生機關として、首將は侍醫を隨へたるも、一般の將士は「ガマ油」「切傷膏」位を各自に携行するに止まり、小荷駄内には携行せざるを通例とした。

右の如く輕易なる後方機關を有し、之が補充を後方策源地より連絡線を設け、兵站輸送による追送は、殆んど稀れで、一作戰間其の携行せる小荷駄にて辨じ、補充は成し得る限り現地に於て調達することに努めたやうだが、長期作戰に於ては後方連絡線を設け特に之が警備にも相當に注意せるが如し。

信長京師を發し朝倉を討伐したる時、當時六角、佐々木の殘黨近江各所に出沒する狀況なりしを以て、後方連絡線確保の爲め、森可成、佐久間信盛、木下秀吉、柴田勝家等を、各要點上に配置して之を確保せしめ、特に長光寺城の柴田勝家の「甑破柴田」としての勇名は、背後連絡線上に惹起したる著名の戰ひで六角承禎軍を擊破したのである。

以上の如く若干の後方機關と、相當の背後連絡線に對する關心を有したりと雖も、總して之に掣肘拘束せられ行動鈍重となり若くは作戰不利に陷りたるが如き狀況尠なきが如し。

然らば對外作戰(朝鮮征伐)にはどうであつたか。

戰國時代の對内作戰に於ては、右の如き狀態を以て概ね作戰の要求に應じ得にるも對外作戰には、如何なる方法を講じたるかと云ふに其の作戰兵力の增大、作戰地の狀態、背後連絡線の延長等により對内作戰の如き小規模なる後方補給機關では、到底全軍補給の方途なく大なる缺陷と錯誤を生ずべきを豫期し、秀吉は大に之に著意し、朝鮮征伐軍の出動前に、朝鮮に我が米を賣り込み其の餘米を以て、外征軍の給養の一部に當てたるは慥かに一法であつたらう。然しながら朝鮮全道の疲弊は、秀吉の豫想と甚しく趣を異にし、現地に於て徵發すべき物資は殆んど缺乏し、從つて糧秣の補充に違算を生じたると、一面には制海權の獲得十分ならずして、朝鮮海峽の航行安定せず内地との連絡自由を缺くに至り一層補給難に陷つた。加ふるに辛じて揚陸したる輸送物資を、朝鮮人夫を使用したるため進捗意の如くならず、後方補給機關の活躍も意に任かせず非常に困窮であつた。

之を要するに古來は、後方機關の繫累少なく軍隊の指揮運用極めて輕快敏活に實施されたけれども、現代戰の如く作戰軍の尨大、兵器彈藥、其の他の資材の需要並に作戰地の狀態等より其の補給關係

に於て隔世の感あるは當然なり。而て此の補充は總て海路船舶輸送に依り而かも南洋作戰地の如き其の距離上から云ふても、未曾有の大作戰であり一大補給の大輸送である。萬一軍の要求に應じ得ざるが如きことあらんか、遠征萬里の外征軍は作戰遂行に重大なる關係を及ぼすことは言を要せざる所である。

現に日露の役に於て我が滿洲軍百萬の將兵に對する給養は凡て海上輸送を以て補給せしが、時恰も露國バルチック艦隊の進航に伴ひ、我が聯合艦隊が日本海々戰の大戰果を獲たればこそ何等の問題はなかつたが、若し反對結果を招來したらば如何なる現象を呈したであらうか、兵站總監としては之に考ふる所ありて既に二月以來大連の兵站基地に全滿將兵の五ヶ月分の糧秣を集積して萬一に備へたと云ふことでさもあるべきことゝ思ふ。

現代戰に於て補給機關の尨大激增、物的人的資源の集荷配當は總動員法に則り全國全力を擧げて之に從事し、船舶の建造又急務中の急を要し各當局が血眼になつて活躍するは、當然の勢ひであるのみならず勝たんが爲めの必要不可缺の要源である。

第二節　水運の利用著意

一、各武將が平戰兩時を通じ後方補給路として水運を特に重要視したるは、科學、交通機關の發達せざる往時に於ては當然たるべき著意にして又重要なる事項であつた。

故に古來より海邊に領土を有する國主は、海岸に居城を構へ止むを得ざる場合に於ては、河川若くは堀川又は水道により海上に連絡するを例とした。京都然り、大阪、桃山、安土或は仙臺城、名古屋城江戸城等の如きは皆然りである。

嘗つて毛利元就の宣傳を見るに「若し陶軍にして嚴島を領有し、我が海上を遮斷せば、我(元就)は絶對絶命に陷らん」と、一見すれば藝州を領有する毛利として一部の海上封鎖をせられたりとて、何等の痛痒を感ぜざるが如きも、往時如何に海上を主要補給路として尊重せしかを想倒し得る所である。

蘇峰氏の說く所に依れば、ペルリの來航により幕府が上下愕然として戰慄したる所以のものは、艦船を以て江戸城を砲擊せらるゝことを恐れたるにあらずして、下田港、大島等を領有せられ江戸城の海路を閉塞せられんことを苦慮したるにありと、以て如何に往時海路交通の重要にして大なる效果を擧げつゝありしことを考察することが出來る。

次に戰時作戰補給を見るも、足利尊氏が九州より北上するに方り瀨戸內海を連絡線として利用せるが如き或は秀吉が小田原攻城及び九州征伐等を見るも主要連絡線は凡て海上輸送である。

尙朝鮮征伐に於て、釜山浦上陸軍の朝鮮內地進入に伴ひ、其の主要補給を海上より、側方補給を行

はんとせるは、秀吉最初よりの計畫であつたが、我水軍振はず、朝鮮の東西兩海面の制海權敵手にありて意の如くならず、事志と違ひ陸路補給の止むなきに至り、從つて其の補給十分ならず、征朝軍の失敗の一因たりしことは確であらう。

今や滿洲各地、支那内地、南洋の主要地は、陸上交通の整備發達しあるも、如何にせん四周環海の帝國としては、凡ての輸送は海上利用に依らねばならず殊に作戰規模の尨大になればなる程莫大なる輸送機關の必須不可缺なるは到底昔時の比でない。然し作戰地域内の水運利用の重要性に就ては深甚の考慮を要し、又現に揚子江を始め支那大陸の大小河川、南洋諸島の水運は成し得る限り陸、海軍の利用しある所である。

結　言

一、要するに往昔と現代とに於ける、統帥の特質なり戰法の型式なりは、各々其の時代に應じ、相對的に進歩發達し、一長一短あり其の優劣を遽かに斷じ難きものあるは當然である。

往時の特長とする所は主として形而上の問題であり、後者の優れるは多く形而下の事項であると謂ひ得る。

抑々統帥の要諦は、有形無形の戰力を集中して、敵軍に指向するのではあるが、戰爭勝敗の主因が「無形的戰力則精神的要素」にあることは、古今を通じて鐵則不動の信念である。

されば往昔名將が、有らゆる無形的威力を最高度に發揚するを以て統帥の本義と心得たるは洵に至當と云はねばならぬ。卽ち統帥參考にも

「統帥とは意志の自由を有する人間をして、其の本能的に保持せんとする生命を抛ち、敵の意志の自由を奪ひ、之を壓伏せんが爲に邁進せしむるものなり」と示しありて、古來武將の本義と全く其の揆を一にするものである。

然るに此の意味に於て、現代の統帥は果して眞の統帥道に合致するや否や、不幸寡聞にして之を窺知するを得ざるも、兎角「狹義に於ける軍隊指揮」の範圍を出でざるものなきやを思はしむることがある。

卽ち作戰上の諸原則、諸方式の運用の妙、近代科學の應用等形而下の事項に關しては、克く整ひ、理論に於て間然するところ無きに近いと云ひ得るが、前記の觀點よりして、人間の靈性を考へ、全軍將兵をして身命を君國に捧げ、笑つて死地に就かしむる爲には、指揮官として不斷の修養、高邁なる德性、慈心の寬猛、責任觀念の旺盛、部下と英樂を俱にし、率先躬行軍の儀表として尊信を受けるものでなければ、劍電彈雨の間に立ち、部下を機械的に使用し能事畢るとなすの誤がないとも云へぬのである。

支那事變開始以來從來の英、米崇拜の觀念は、彼等の露骨の敵性行爲により、我國民の憤怒を懷かしめ、いつかは膺懲の鐵槌を以て報ゆる時機あるを期しつゝあつて、大東亞戰の勃發は眞に妖雲を拂拭して旭光を望みたる意氣に燃ゑ、徹底的に彼等を打倒する爲には彼等の非人道、僞善、暴戾、桎梏の本態が暴露したる今日では如何に拜米、英の徒も初めて醒め、我が國體の本義に立還つたと思ふが、事變前迄の拜外思想は、高位顯官を始め市井の一布衣の徒に至るまで親米熱、拜英病に冒され、當然なすべき日本の國策すら兎角彼等を憚りて遠慮し、さわらぬ神に祟りなし式の方針を執り、隱忍自重と言ふよりも、彼等を待つに優先觀を以て迎へたのである。兵學界に於ても明治初年のメッケル宗は、口を開けば獨逸、筆を執れば獨逸で日も夜も獨式に氣觸れた時代もあつた。從つて彼等の戰略、戰術を齦嚙玩味するの遑なく、忽卒に嚥下し此の戰略、戰術こそは我が統帥なりと過信したるもの少からず、幸ひにも日露戰役を始め過去數度の對外戰役により得たる貴重なる體驗は、我邦獨特の統帥を生み、皇軍統帥道の本義に立脚せられつゝ、統化融合に努め支那事變に及んだのである。

統帥道は敎へて曰く

統帥の根本意義は、指揮官の戰略戰術上の考案を、如何にして意志の自由と本能とを有する人間に應用して實行せしむべきやにある。

「戰略戰術は實に適切なる統帥に依り力を生じ、光彩を放つもので、情況に適する至當なる戰略、戰術の適用も、統帥宜しきを得ざれば戰は失敗に歸するものとす、戰略戰術の講究は、統帥の道を究むる爲の重要なる階梯である、然れども吾人終局の目的は統帥の道を研め、其の妙を發揮することを肝銘せねばならぬ」と此の間の消息を道破したものと云へよう。

現代統帥の眞の統帥道に合致する爲には、左の如き見解は一通り考究するの要があるものと信ずる。

一、腹の統帥

二、將德の修練

三、構想にのみ耽らず獨創的統帥

四、將兵の心理に絕大の理解

五、率先躬行範を衆に示し苦樂を俱にす

六、功を讓り勞を犒ふ慈愛の寬猛心等々

我往昔の武將が將帥自ら武士道の權化を以て任じ、其の人格則ち將德を以て己を虛しうし、躬を以て部下を率ゐるを統帥の要道としたるは、古今を通じて喩らざる聖訓である。

皇軍が常に寡を以て衆を破り、赫々たる戰果を獲得しつゝあるは、畢竟將兵一致、忠君愛國の至誠、蹇々匪躬の節義を致し、最高調の意氣を發揚し、必死の念願と必勝の信念とを以て、攻擊重點主義

に徹し且努めて放膽神速なる機動により、敵の意表に出でるを以てゝある。之が爲には一軍の將帥並に指揮官たるものは、其の脈管の中に悠久三千年來の大和魂を基調としたる磅礴たる武士道精神を塡實し、衆望歸向の核心となり、我が肇國の精神、建軍の本義に則り己を空しうする無我の崇高なる統帥を極むると共に、用兵の學理に通曉し九鼎大呂に比すべき大機大量を修め、森嚴なる威容と骨肉の溫情とを備へ、人間味を理解し率先事に當り其の心腹を把握し、敵をして端倪追隨を許さざる眞の大指揮官たるに到達せねばならぬと信ずる。

第七章　我が古戰史摘錄

（前章迄に述べたる戰例中の重なる戰蹟概要を參考の爲本章に摘錄す）

第一節　嚴島夜襲戰

一、陶晴賢討伐の動機

晴賢其の主大内義隆を弑し、其の甥大友義長を豐後より迎へ、立てゝ大内氏の嗣となす。

當時大内氏の部將たりし元就、郡山城に在りて逆臣晴賢の簒虐を憤り且義隆の遺書を得「我が怨を霽さんもの汝の外になし願くば我が爲に賊臣を滅ぼせ」とありたれば、元就部下諸將を集め軍議す。

小早川隆景の進言により、朝廷に逆臣誅伐を奏聞し直ちに勅許を得大義名分を明らかにし、檄を遠近に飛ばして義軍を募る。

陶晴賢聞いて大に怒り、周防、長門、豐前、筑後、岩見の兵を發し元就を攻擊せんとす。

元就此の情勢に對し、寡兵を以て大軍を制するは地の利に依るを要件とし大體次のやうな作戰方針を定めた。

「敵の兵力は三萬を下らず、必ずや此の優勢を以て先づ櫻尾、草津の城塞を攻略するならん。我が兵力は、全部を悉くして僅かに五千に過ぎず、地勢は一帶の平野にして何等據るべき要

衝なし、寡兵を以て衆敵を破るべき戰場にあらず、若かず敵を嚴島に誘致して之を擊滅するに在り」と

弘治元年五月俄かに嚴島宮尾に城塞を築く、六月竣工し部下巳斐豐後守、新里式部小輔をして兵僅かに數百を以て之を守らしむ。

一夜、元就琵琶法師を招き平家物語を聞く、何事か突如として左右に向ひて曰く「晴賢若し嚴島に渡り、宮尾城を攻擊せば、我が防禦到底保し難し、老臣共の諫めを用ひざりしこと誠に遺憾なり、今更ら詮なし他言無用なり」と戒しむ、琵琶法師は敵の放てる間諜なるを知つて逆用したのである。晴賢此の密報を得先づ嚴島を攻略せんとし、九月自ら兵二萬騎、戰艦千餘隻を率ゐ進んで岩國に至る。

陶軍の部將大和與武、弘中隆包等策を具申して曰く「兵を二手に分ち一は櫻尾城を攻略し、一手を以て毛利軍の救援を遮斷し以て、彼を進退の窮地に陷らしむるを得策とせん」と、首將聽かずして曰く「予は一舉に嚴島の防禦薄く、兵寡きに乘じ之を屠り、爾後の前進據地となさん」とす、此時毛利の將桂元澄の内應密書を得、晴賢愈々意を決し嚴島に向ふ。

陶軍は塔の岡附近に上陸と共に火を民家に放ち、九月二十一日拂曉より宮尾城を攻圍し直ちに攻擊を開始す、城兵克く戰ひ克く防ぐ意氣鐵石の如し。

晴賢終日攻むれども、遂に塞の一角をも破るを得ず、翌日自ら馬を陣頭に進め諸軍を鼓舞激勵すれども死傷續出して拔くを得ず、攻圍すること十日、攻圍軍の將兵疲勞困憊す。

二、毛利軍の夜襲戰

元就此の情況を看破し、敵は我が誘致の策に陷りたるを知り、精兵三千餘人を率ゐて草津に至り渡海の準備を進む。

二十九日の日沒頃より風荒れ雨降り、海上の波濤激して白馬の跳るが如く暗憺たる妖雲天を覆ふ。元就大に喜び敵の意表に出づるは今夜なりと卽時乘船を命ず、唯一日分の糧食のみを携行せしめ、勝敗を此の一舉に決せんと欲す。

船團は熊谷信直を第一線とし、元就其の子隆元と共に第二船團の先頭にありて主力を率ゐ、諸船悉く篝火を滅し、唯だ首將の乘船に一つの燈火を目當として進む、風雨益々荒れ、波愈々高きも各船牧を銜み暗を破つて進む。軍船辛じて皷の浦に着するや、元就命じて悉く船を前岸に還し必死背水の決意を示し、主力を以て塔の岡の背後に進み、一部隊は小早川隆景、吉見正賴の指揮を以て海上より直ちに塔の岡に向ふ。

敵軍風雨を恃みて警戒を怠る其の虛に乘じ、元就の軍は豫期する戰鬪部署に就きたるも敵兵未だ曉らず、元就の命令一下攻擊は開始せられ、天漸く明くる頃高所より怒濤の如く敵陣に殺到す。敵主

力軍は全く不意を襲はれ混亂し、槍に觸れ刀に刺されて傷き死傷續出す。元就意氣昇天大聲叱呼して突進す、隆景軍又敵將弘中隆包軍を壓迫し駒ヶ林に兩軍死鬪し遂に之を破り、主力軍に策應し敵首將晴賢軍に迫る。其の將兵相次で潰走し皆船に飛び乘りて遁る。晴賢身體肥滿行步自由ならず部下に扶けられて靑海苔の浦に至れば一隻の船だになく遂に意を決して高安ヶ原に至り、最後の決意をなし彼の有名なる「五衰滅色の秋なれや、落つる木の葉の盃、飲む水は谷水の、流るゝもまた涙川、水川は吾なる物を、もの思ふ時しも、今こそ限りなりけり」（謠曲鬼界島の一節）を聲朗らかに謠ひ、從士と共に自刄して亡ぶ、陶軍の死傷四千八百餘人、此の一戰に於て毛利氏覇業の基礎成る。

第二節　姉川合戰（姉川は近江國加須川嶺より龍ヶ鼻の北を流れ琵琶湖に注ぐ要圖は第五章第二節參照）

一、姉川合戰の動機

織田信長西上の路を開かんと欲しまづ近江を計らんとす、淺井長政小谷城（江州東淺井郡小谷村）に據りて北近江の六郡を領し年壯にして勇名國中に冠たり。信長兵戰を用ひずして淺井氏を靡かんとし姉を長政に婚し其の政略により目的を達せんとす、永祿八年四月織田、淺井兩氏は成婚により盟約を結ぶ。

此の年足利義輝逆臣に弑せられ、其の弟義昭京師を遁れ近江に走り六角義賢に賴り兇徒討伐を依囑するも應ぜず、去つて若狹に赴き、其の妹婿武田義統に依らんとするも微力其の任に堪へざるを知り、更に越前に赴き朝倉義景に依る。義景之を一乘谷（淺倉の居城）に迎へ在ること三年、義景敢へて事を擧げず、義昭所詮大事を託するに足らずと考へ細川藤孝等を使して岐阜城主織田信長に賴る。信長曩きに　內勅を蒙り今又義昭の寄託を受け、平素の志業を達成するに絕好の機なりと認め、直に義昭を岐阜に迎へ、着々として西進の準備を始む。

先づ其の進路上に據る、淺井、六角、朝倉に使をして、義昭將軍西上歸洛すべきにより其の進路を開放し協力すべきを慫慂せしめるに淺井長政は直ちに之に應じたるも、六角冷然として之に應ずる色なし。信長自ら兵を率ゐて六角氏を討つため近江に入り淺井軍と協力し觀音寺、箕作の城塞を始め十八城を略し、九月二十八日義昭を奉じて京師に入る。

越前朝倉義景は、年來織田信長とは吳越の感ありて不快絕交の關係にあり（應仁の亂前迄は、織田、朝倉俱に武衞（斯波）の家老にして後朝倉は越前の守護職左兵衞義廉を逐ふて自ら之に替りたるを以て、織田氏は之を逆臣と譏り、朝倉は織田を陪臣と卑み其の間吳越の如し）、義昭越前を去り信長に寄るに及び、益々兩氏の感情を激化す。

信長京師に入りてより朝倉の入京を促がせども應ぜずして金ヶ崎、手筒の二城を修築し戰備を固め、愈々對織田軍に敵性行爲を示す。

二、朝倉、淺井聯合軍に對する織田、德川同盟軍の作戰行動

元龜元年四月信長は、愈々朝倉を討伐するに決し同盟軍たる德川家康に出動を促し俱に越前に進攻し、手筒、金ヶ崎の前哨陣地を突破し將に朝倉軍の本據一乘谷を攻略せんとす。

此時淺井は年來朝倉と義盟固く、他面織田とは姻戚の關係にあり、此際何れにか去就し旗幟を鮮明にする要に迫まられ、長政の父久政、信長の不信を詰り、頓ては當小谷城を屠るべきを恐れ、義盟厚き朝倉を援け、舊交は新緣よりも重し宜しく織田軍を夾擊粉碎すべきことを主張し、部將又之に同意す。淺井長政遂に斷乎として信長と絶ち、朝倉と聯合すべきを聲明し直ちに進んで織田軍の背後を衝かんとす。

信長此の情報を得、家康と謀り急遽軍を京師に還すに決し德川軍をして後衛たらしめ、其の主力は一擧に若狹地方より撤退を始む。此の機に乘じ、朝倉軍は主力を提げて出擊し、淺井軍と南北相呼應して織田軍を殲滅せんとするや、木下秀吉自ら請ふて其の收容に任じ任を全ふして全軍京師に集結す。

三、姉川附近の決戰

淺井長政は近く織田軍の攻擊を豫期し、木下秀吉の守備する織田の前進基地たる長濱城に對し、防備を固め長比、苅安に砦を設け、鎌羽の城を修し部將堀秀村を配し、尙ほ横山城(臥龍山上)に大野木、三田村等の勇將を選み守備せしむ。

秀吉長濱城に在りて此形勢を察知し、謀を以てまづ鎌羽城を無血降伏せしめ、越前兵の守備する長比、苅安の二砦を占據し、信長の率ゐる主力軍の來着を待つ。

六月二十日織、德同盟軍は、近江阪田郡小田村附近に集結し、情況を搜索したる後左の如き攻擊部署を定む。

一、織田信包、丹羽長秀、水野信元等三千餘人を以て横山城攻圍

二、右翼隊

森可成、齋藤長龍、不破光治等の軍約五千餘、雲雀山附近に

左翼隊

信長直轄軍約二萬餘、虎御前山附近

右の部署を以て淺井の本據小谷城を威嚇し、一擧に攻略せんと企圖したが、急に敵を城外に誘致し擊滅せんとして一時小谷城の圍を解き軍を龍ヶ鼻附近に退避せしめ、横山城を攻略すると共に、德川軍の來着を待つに決す。

德川家康兵五千を率ゐ、六月二十六日春照に着し次で龍ヶ鼻の信長軍に合す、時に天暑くして蒸すが如し。

淺井軍は果して城を出で大寄山（淺井郡隅田村北方にあり）に據り、朝倉軍又來りて合流し將に兩軍の決戰は開始されんとした。

織、德軍の攻擊部署

横山城攻圍軍、丹羽、氏家等約五千餘

主力軍を左の七隊に區署す

第一隊坂井政尙、第二隊池田信輝、第三隊木下秀吉、第四隊柴田勝家、第五隊森可成、第六隊佐久間信盛、本隊信長直轄軍

兵力各隊各三千人計一萬八千人、本隊五千餘人、總計二萬三千

德川軍（左翼第一線）

第一隊酒井忠次、第二隊小笠原長忠、第三隊石川數正各々兵一千人、本隊家康直轄兵二千、後陣稻葉通朝兵一千計約六千人

六月二十八日拂曉、織德軍は進んで姉川の南岸（左岸）に達す。

淺井、朝倉軍の情況

信長軍が急に淺井軍の本據小谷城の圍を解き、龍ヶ鼻に退き、其の主力を以て、小谷城と脣齒輔車の關係にある横山城を猛攻す、城將秀俊、首將長政に其の急を告ぐ。

淺井長政遂に横山城を救援すると共に、朝倉軍の來著するを待ちて信長軍を夾擊せんと決心し、六月二十五日自ら兵八千餘人を率ゐ城を出で大寄山（姉川北側高地）に陣す。

朝倉軍は容易に來ざるも督捉再三、漸く二十七日義景の一族朝倉景健一萬餘人を率ゐて大寄山附近に來著す聯合軍の志氣頓に昂る。

淺井、朝倉の兩首將直に軍議を開き、速かに横山城を救援すると共に主力を姉川北岸に進め、織、德同盟軍と決戰するに決す。

攻擊部署を左の如く定む。

淺井軍　第一隊磯野貞昌兵千五百人、第二隊、淺井政澄、第三隊

新庄直頼　兵各々一千人

本隊長政　兵三千五百人

朝倉軍　第一隊、朝倉景紀、第二隊、前波新八郎、兵各々三千人

本隊景健　兵四千人

右の部署定むるや夜中前進準備を整へ、斷乎攻勢を企圖し、夜半出發、淺井軍は野村附近、朝倉軍は三田村附近に午前四時迄に攻擊準備の位置に就く。

兩軍戰鬪經過の概要

織、德同盟軍の作戰

六月二十八日拂曉兩軍姉川を夾んで相對峙し將に戰鬪は開始されんとして旗鼓堂々嵐の前の靜さを見る。

織田軍は淺井軍を、德川軍は朝倉軍を各々攻擊目標とし、先づ南軍は弓、鐵砲を以て戰鬪を開始す。

朝倉軍の首將景健、德川軍の劣勢なるを望見し、一擧擊滅せんと姉川を渡り、第一、第二陣の順序を以て近迫す。德川軍の第一陣酒井忠次迎擊奮鬪して退くや、第二陣小笠原長忠代り戰ふもこれ又退く、朝倉軍勢に乘じ突進するを第三陣石川數正迎へ擊ち奮鬪最も努め第一、第二陣、機を見て急に反轉し朝倉軍に迫る。兩軍槍を揃へ、刀を併べ、鯨波を作つて一進一退遂に朝倉軍を姉川河岸に壓倒す。

淺井軍の先陣驍將磯野員昌の奮戰

驍將磯野員昌は、淺井軍の第一陣を指揮し自ら率先して織田軍に殺到す。忽ち其の第一陣坂井軍を破り其の子久藏以下百餘人を斃し直ちに第二陣池田信輝軍を擊破し、勢に乘じ第三陣木下秀吉軍を蹶散らす。淺井長政此の戰況を觀益々諸軍を督勵し奮然として突進を命ず、磯野軍愈々勇猛、忽ち第四陣柴田軍を破り尙も進んで第五陣森可成軍を衝く、森可成叱咤激勵敢然として拒ぎ戰ふ、信長の麾下眼前にありて危し。

德川軍朝倉軍を擊破す

家康、織田軍の戰況非なるを見るや、部下を勵まし本隊たる二千人先きを爭ふて突進し兩軍激戰死鬪勝敗容易に決せず。家康、榊原康政に命じ敵の右側背に迂回せしむ、榊原隊奮進水田を馳せ、姉川を渡り斷崖を攀登り、敵の右側に出で其の側背を衝く。朝倉軍之が爲めに陣容亂れ、其の機に乘じ正面より突進、遂に朝倉軍混亂に陷り右往左往に崩れ走る、德川軍勝に乘じて猛追す。

家康の後陣たりし稻葉通朝は、德川軍已に朝倉軍を破り追擊に移る、之に反し信長軍は頗る苦戰の狀況を見、獨斷淺井軍の右側背を衝かんとし、兵を進めて姉川を渡り急進す。

横山城を攻圍中の氏家、安藤兩將又信長軍の急を望見し各々兵一千を率ゐて驀地に淺井軍の左側に突進す。

信長軍此の兩方面よりの救援に志氣頓に昂り、各々其の當面の敵に向ひ反轉して邀擊す、淺井長政麾下部隊は勇猛突進戰況頗る有利に進展しある時、右方の朝倉軍、旗色亂れ次いで敗退するを望見すると共に、突如として右側から稻葉軍、左側より氏家軍に攻め立てられ其の上正面より織田主力軍に反擊を受け三面より合擊せられ且背後を遮斷せらるゝ虞あるにより志氣頗る沮喪し、總敗軍となり朝倉軍の殘兵は越前に、淺井軍の敗退軍は小谷城に、其の驍將磯野員昌の部隊は佐

和山城にと夫々遁入し、北軍の精鋭多く此の役に斃れ、次で横山城も秀吉の詭計により開城した。此の日の戰ひ午前五時頃より開始せられ、正午前後に終り、織德軍の死者八百餘人、淺井、朝倉軍の死者一千七百餘人の大激戰であつた。

第三節　長篠合戰（三河國南設樂郡長篠村長篠城は此地にあり豐川の上流四方山に圍まる）

一、合戰の動機

參州作手の城主奥平貞勝始め今川義元に屬し其の敗死後、德川家康に屬す。天正元年一月武田信玄兵三萬を率ゐて、家康軍の第一線城塞たる菅沼定盈を參州野田城に攻め、勢威頗る振ふや菅沼、奥平等信玄に降る。信玄遇々銃創を蒙りて卒するに及び、再び家康に復歸するや、武田勝頼怒つて其質たる子供竝に定昌の室を磔刑を行ふ。天正二年五月家康長篠城を拔くや、其の地甲斐、信濃の要衝に當り特に多年武田軍の窺ふ所なれば、特に奥平定昌をして守備せしむ。定昌族多く兵又衆し、其の家康に屬してより勝頼の憎むこと特に甚し、天正三年四月まづ定昌を討たんため大に兵を甲斐、信濃、上野の三州に徵し將に三河に向ひ進擊せんとす。警報を得たる家康は乃ち命を定昌に傳へ長篠城の守備を嚴にせしめ、尙ほ松平景忠、同家忠、同親俊の三將をして赴援せしむ。定昌其の一族たる七人衆と共に兵五百を以て守備配置に就く。

武田軍總兵力　二万七千余人
奥田軍總兵力　五百余人

二、長篠城の攻守戰

五月一日甲軍進んで城を圍む、對峙數日戰ひ未だ開かず、七日に至り甲軍突如火砲を以て砲擊を始む、砲聲轟々として山谷震ふ。

八日甲軍一齊に攻擊を開始し猛然として肉迫す、城兵大石巨木を投じ拒ぎ戰ひ、夜に乘じ部將奧平定盛等城外に突進し敵を衝く。甲軍本丸に對し地下坑道を掘り近迫せんとすれば、城將亦地下道を鑿ちて迎へ火砲を放ち猛擊して擊退す。甲軍攻圍旬日にして城の一角も拔くを得ず、遂に甄郭の糧秣庫を奪取するに決し、武田の名將馬場、小山田等は大通寺より兵を進め、突擊又突擊、守將家忠克く拒くも遂に敵せず甲軍四面より迫り終に糧食庫を奪はれた。勝賴守兵の頑强なるを見て長圍の計を施す。

城外には塹柵を繞らし、川中には綱索を張り鳴子を附け、警戒至嚴一兵と雖も遁すまじと晝夜の監視頗る嚴なり。

命と賴む糧秣倉庫を奪取せられ、城中の蓄へ十日を支へ得へんこと叶はず、玆に忠烈無双永世武士道の龜鑑を示したる鳥居强右衞門勝商夜陰に乘じ、野手門を潛り川中を潛り、拂曉雁峰山に至り狼烟を揚げて無事敵圍を脫出したることを信號し、岡崎に赴き家康に見え詳さに城中の苦戰を報告す。

三、織田、德川軍長篠に進擊し對武田軍と決戰

兩軍の陣容

天正三年五月十八日、織德聯合軍は、濃尾、遠參の諸軍長篠西方設樂原に進出し甲軍と相對す。

武田軍は五月二十日瀧川を渡り、清井田に進み、兩軍の陣容要圖の如し。

酒井忠次鳶の巣山の夜襲

信長甲軍の陣容を偵察し、其の至嚴にして正面よりの攻擊容易ならざるを察知す、此時德川の部將酒井忠次献策して曰く、速かに敵の左側背に迂回し、鳶の巣高地を奪取せば、其の背後の危險を感じ主力の攻擊容易なるべしと信長一度は之を斥けしも、夜忠次を召し卽時出發、銃卒五百を屬し金森、佐藤を配して軍監とし、家康又松平家忠兄弟、本多父子、松平伊忠兄弟等をして援助せしめ兵三千人を率ゐ、大雨を冒し豐川を渡り、嶮岨を攀ぢ、暗中模索、翌二十一日拂曉鳶の巣堡壘を奇襲せしむ。守將武田信實力戰して死し遂に陷落す。

信長軍の攻勢

信長は酒井軍をして二十日鳶の巣山を奇襲せしむると共に、自ら戰鬪司令所を茶臼山に進め、諸隊を棚内に配置し、別に甲軍を誘致する目的にて佐久間信盛の一隊を柵外に出し、又德川軍方面よりも大久保忠世の一隊を柵外に出し銃手三百を以て側擊の準備にあらしめ甲軍の出擊を待つた。

五月二十一日鳶の巣山には炎々たる焰が騰り、突喊の聲山上に震ふ。

甲軍之に牽制せられ、總帥勝頼全軍進擊に決し下令す。

甲軍の左翼隊は山縣昌景の指揮を以て、德川軍の右翼隊たる大久保隊の右に迂回し、木柵の備なき方面より聯合軍の右側背に迫らんとするも小川の斷崖高くして渉るを得ず、已むなく大久保隊に突入す、大久保隊待ち構へたる銃擊隊にて亂射し、續いて白兵戰となる。

甲軍の中央隊は、織田軍に向ひ攻擊を開始す、陣地前の木柵堅固にして入るを得ず、此の時織田軍より銃火を浴びせ粉碎せられ其の目的を達し得ず。

織田軍の左翼柵外に甲軍誘致の爲進出せし、佐久間隊は甲軍の右翼隊馬場信房軍と衝突し、佐久間隊佯り退き敵を誘致せんとせしも馬場隊用心深く一氣に木柵に迫らず、他の部隊をして進擊せしむるや何れも銃擊されて苦戰に陷り、柴田、羽柴隊は北方より迂回して之等を側面より攻擊し遂に全隊殆んど擊滅された。

甲軍の總豫備隊は、主として中央隊の後方に續行し、奪戰せしも其の效なく、かくて左翼隊山縣戰死し其の他の諸隊も過半死傷す。

信長此の戰況を觀破し、全軍に總攻擊を命じ、織田軍は正面より、德川軍は左側より一齊に前進を開始す、此の時迄動かざりし馬場隊は勝頼に退去を勸め、自ら其の收容に任じ且戰ひ且退き、遂に內藤と共に討死す。

甲軍潰走し瀧川に阻てられ溺死するもの無數、約二萬の兵は生殘者僅かに三千に過ぎず、勝頼又身を以て免れ歸國の途に就いた。

戰鬪は五時―十五時(約十時間)、聯合軍の大捷に歸し武田氏の亡滅前途に深く陷入つた。

長篠城は遂に堅忍克く其任務を達した。世に大楠公の千早城、眞田昌幸の上田城の防守と共に本朝の四籠城と稱せらる。

畢竟するに本會戰は、兵力の優劣と織田軍火器の裝備、信長、家康の作戰愼重にして巧妙なるに反し、武田軍の上下一致の協力心を缺き、勝頼の猪突暴進主義に禍されたる結果と見るを得べし。

第四節　石橋山合戰（神奈川縣足柄郡石橋村の西側にあり）

一、源頼朝の擧兵

頼朝伊豆に流され源家の再興を三島明神に祈請すること百ヶ日、治承四年八月三日、叔父新宮十郎行家密に來りて、以仁王の平家討伐の令旨を受く。

頼朝、北條時政を召して擧兵のことを謀る。時政諸將の向背を察知して說き、東八ヶ國の大名小名に密に檄を飛ばして將士を招き、愈々八月十七日を以て擧兵に決す。遠近にある源家の舊臣忍び忍びに集まり、近江の佐々木貞義、同高綱は共に京師より、宇都宮太郎定綱は下野より、次郎經高は相模より三郎盛綱は同澁谷より各々馳せて頼朝の許に集まる。

伊豆の目代平兼隆を夜襲す。

頼朝十七日の夜を以て事を擧ぐるに決し、まづ八牧にある平兼隆を夜襲し、出陣の門出となすに決し、時政に命じ其の準備をなさしむ、日沒と共に諸兵忍び〳〵に集まり、時政乃ち佐々木兄弟を始め、郎黨八十五騎を率ゐ八牧の塞に向ふ。

時政兵を二手に分け、佐々木兄弟は搦手に向ひ、時政は追手に向ふ敵塞の濠端に迫り、一時に鯨波を發す。塞中驚き騷ぎ防備も僅かに弓を取り出でゝ防ぐ、追手、搦手の兩軍必死となりて攻擊すれども敵頑强に抵抗す。此時宇都宮定綱、四郎高綱等馳せ來り共に力攻す、加藤景廉兄弟塞内に突進し遂に兼隆を殺し、火を障子に放ち炎焰忽ち高く騰りて、頼朝に信號す、遠近の將士風を望みて來り屬す。主なるものは狩野茂光、天野遠景、仁田忠常、土肥實平其子遠平、岡崎義實其子義忠、土屋宗遠等で頼朝軍議を土肥に開き大に關東八州の諸豪を集むるに決し、令旨と共に頼朝の教書を添へ人を遣して說かしめ、大庭景義、三浦義明、千葉常胤父子等義によつて集まる。八月二十二日頼朝愈々北條、佐々木、土肥以下僅かに三百騎を率ゐて早川尻に馬を進む。

二、石橋山の合戰

大庭景親、平氏の爲に頼朝を討たんと欲し、其の弟俣野景久、佐々木義淸、首藤經俊、熊谷直實、

岡部忠澄、曾我祐信等三千餘騎を率ひて石橋山に向ふ、二十三日石橋山の麓に達し、源軍と溪を隔てゝ相對す、戰ひは大庭軍より開始され、景親自ら陣頭に立て進む景久長尾兄弟、曾我祐信等七十三騎先きを爭ひ突進し來る、源軍は之に對し眞田與一義忠、家安等馬を馳つて進む。日全く昏れて雨降り天暗くして路分からず、右手は山、左手は海、たゞ一本の道路上に兩軍の先鋒忽ち遭遇し、一騎打ちの格鬪となり、暗夜の接戰敵味方入り亂れて戰ふ。源軍の驍將次々と討たれ、遂に敗れて土肥に退く。

賴朝自ら弓をとり敵を防ぎつゝ松山の奥深く遁れ、附き從ふもの時政以下僅かに數人、大庭景親兵を勵まして賴朝を追ひ來る、賴朝事成らざるを知り、時政以下を四散せしめ、土肥父子、岡崎、新開、土屋等六人のみを從へ大樹の臥木の空洞に隱る。

景親求むること急なるも、未だ賴朝を得ず、此時大庭の從弟梶原平三景時竊に欵を賴朝に寄せ、將來身の榮達を圖らんとしあり、賴朝等の隱れある空洞を知りつゝ身を以て之を庇ひ、其の難を遁れしむ。

賴朝主從八騎漸く虎口を脱して眞鶴に走り、七騎落ちとして有名なる舟出にて安房に向ひ再擧を圖る。

第五節　一の谷の攻防戰（攝津、播磨の國境にあり前は海、後は山俗に濱須磨と稱す）

一、動機

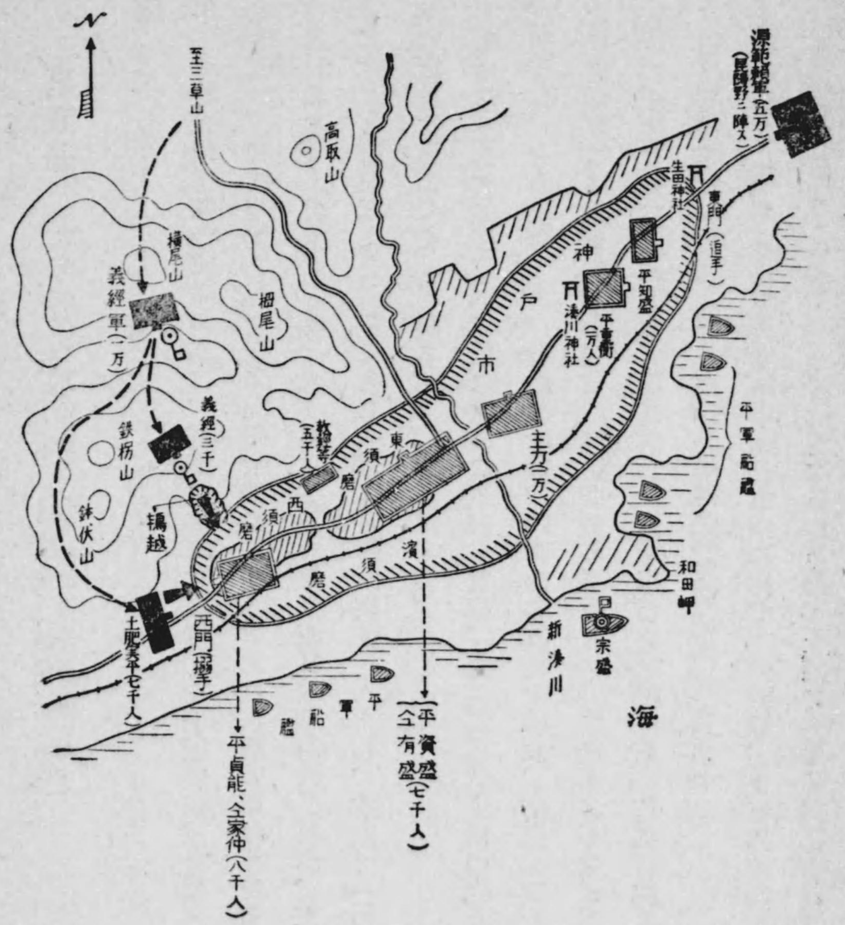
壽永二年　木曾義仲、源行家等の爲に、京都を攻略せられたる平宗盛は、安德天皇、建禮門院を奉じ、劍璽を收め、闔族一統と西に奔り九州太宰府に入る。元來西國の地は平氏祖先の恩威を殘せる所なり、忽ち風を望んで遠近の將士來り屬し、その勢威西日本十四國に及び、軍勢十萬に達す。玆に於て、木曾軍と賴朝軍と合戰中に乘じ一擧に京師を恢復せんとし、進んで一の谷に築き、壽永三年一月平軍屋島を出てゝこゝに移る。

一の谷の地形たる前面一帶は海、後は峨々たる山を負ひ、廣袤三里、生田の森を東門（追手門）、一の谷を西門とし、その兵力十萬、戰艦千餘艘、陸に海に旗幟を聯ね、防備又嚴たり。

正月二十日義仲粟津に敗死するや、後白河法皇更めて源範賴、同義經に平家征討の勅を賜ふ。

二月三日源軍京師を發す、追手の大將範賴兵五萬を率ゐ播磨路にその部將は梶原景時、曾我祐信千葉常胤、相馬師常等にして二月五日攝津昆陽野（河邊郡稻野村）に達す。

搦手の大將義經は兵一萬を以て丹波路より三草山に出で、平資盛、平有盛等の城外支隊を夜襲し、多井畑（須磨西北約四粁）に達す。その部將は畠山重忠、土肥實平父子、三浦義澄、和田義盛、熊谷



直實武藏坊辨慶等なり。

一の谷城平軍の防禦配備

生田東門方面（正面）　新中納言知盛、三位中將重衡等約一萬餘騎

一の谷西門方面（背面）　平貞能、同家仲等約八千餘騎

山の手方面　能登守教經、越中前司盛俊等約五千餘騎

主力部隊　大部は須磨附近一帶に集結す、但御大宗盛は海上船中にあり。

海正面防備　主として戰艦之に任じ、海岸に亂杭逆茂木を連ね五ヶ所に高櫓を築く。

源軍の攻擊部署

義經軍　主として敵の西門並に側背に向ふ如く、多井畑に於て土肥實平を指揮官とし總勢約七千を以て鉢伏山西側地區より一の谷西の木戸に向はしめ、義經は自ら殘餘の畠山、熊谷、平山、後藤の諸將並に麾下の勇士約三千を率ゐて、綱下峠より折部山、鉢伏山を過ぎて鵯越の嶮岨に向ひ敵の側背を奇襲す。

範頼軍　生田の東木戸に向ひ、義經軍と呼應し、一舉に敵を擊滅し海に壓迫せんとす。

戰鬪經過の概要

一、一の谷の合戰は、古來詩的感傷的の傳說を殘し、我國古戰史の中にも大衆的に印象深き戰鬪である。殊に義經の不羈豪膽なる千仞の斷崖を突破して、敵の全く意想外に出で、或は梶原景時我子景秀の爲に群る敵中に突入して救ひ出し、生田の梅の一枝を把つて簾に挿し花は散れども香ぞ床しき武士の心持ちを示したるが如く又直實の敦盛を討ちとりたる其の場面、妙齡の公達、大剛の勇士然かも敦盛其の名を名乘らずして須磨の海濱に散る等數々の名殘を止めたのである。さて義經多井畑に於て諸情報を綜合し、主力を土肥實平に指揮せしめ七千餘騎を授けて、一の谷木戸口に向はしめ、自ら三千餘騎を率ゐて山道を潛行し、人馬肅々將士の意氣凜然として、敵の側背に奇襲を行はんとす。漸くにして敵の城塞の北側高地上に達し、遙かに眺むれば、眼下に目指す平軍の城塞を瞰視し、南は海を距てゝ淡路島、西は明石の浦、汀に續いて火の見ゆるは平軍の篝火、海上幾百の船艦を浮べたり、素破や敵城脚下にあり、將士皆勇躍す。

時は二月七日六時、東西の兩門は今や戰正に酣なり、義經鵯越の一角に立ち、兩軍の劍聲叫喜喧々たるを聽きつゝ、一刻も早く側背に迫らんと脚下を見降ろせば、斜崖急峻にして、小石交りの白砂馬を進むべきも見へず、義經躊躇すべきにあらずとして、嚴として前進を命ずるも、將士の馬怖れて進まず、義經命じて白覆倫と黃覆倫の鞍置きたる二頭の馬を牽かしめ、白は源軍、黃は平軍ぞと呼ばはりそれを追ひ落せば、兩馬する〳〵と白砂を降りしも黃馬は中途にて斃れ白馬はさつと地上に突つ立ち上を仰ぎて嘶く、源軍大に勇み義經自ら奮然として斷崖を進めば、將士續々として馬と共に進む。伏て下方を見れば屏風を立てたる如く滑らん術もなく、歩むことも出來ず一同又逡巡す、佐原義連目を塞ぎ、鞭を加へて跳んで下る、旺盛なる攻擊精神は、天嶮何物か阻まん、意氣溢り、前馬後馬相重りて三千餘騎宛ら一線の糸の如く全軍悉く下り、一齊に白旗三十餘旒を押し立てゝ敵陣に突入す。

平軍は東西二門に全力を傾けて死守し而かも勝敗未だ決せず、然るに義經軍の側背奇襲に全く狼狽し、部隊混亂す、源軍勢に乘じ猛攻し、義經令して火を放たしむ、辨慶忽ち館内に侵入し火を放てば、海風煽りて炎々たる猛火假屋に燃え移り、平軍火に攻められ烟に包まれ、前後側背の三面合擊に堪へず遂に大勢は決し潰走し始む。既にして範頼軍は東門を破り、土肥軍は西門を陷入れて、東西の源軍一齊に突入すれば、平軍皆海濱に走り、先きを爭ひ船に乘らんとし溺死するもの數千人、宗盛父子　天皇及び女院を奉じて海上にあり一門の諸將來り集まるを待ち、纜を解き屋島に退却せんとす、然るに諸將多くは戰死し又は淡路に遁れ、今や須磨の海濱一帶は至る所掃蕩戰となり各所に一騎討ちの格鬪となり、かくして一の谷の城塞は全く陷りぬ。

一の谷城は、地形的よりすれば眞に天嶮的の隘路にありて、例令平軍の勢威振はざるも、一門宗族

の團結鞏固にして、而も新に加りたる山陽、四國、九州の諸軍を以て源軍に對するには、兵力に於て大差なく殆んど互角伯仲の間にあり、平軍にして此一戰に源軍を擊破せば、一擧に京師を恢復し得たりしならんも、如何にせん源軍の攻擊猛烈を極めたると、軍の素質又剛健にして練武優り、加ふるに智勇拔群の名將義經の斷乎たる信念を以てせし作戰は、全く敵の意表に出でさすがの平軍を潰亂せしむるに至れり。

作戰要務令二の一六〇に敎へられてある如く防者としては、臨機配備を變更し又既に築設したる工事も之を棄つるに躊躇してはならぬとは味ふべきことで、本戰鬪の如く平軍は只だ周章狼狽して、義經の奇襲に對し適宜の處置をとらざりしは、敗退の重大原因であつたらう。

第六節　武田勝賴軍の敗滅戰

一、武田軍の作戰方針と軍の素質

戰國の英傑武田信玄の作戰方針の根本は、飽くまで攻勢出擊であつて、其の信念として「人は城、人の石垣、人の堀、情は味方、仇は敵」を唯一の信條として、自國領內には一步も敵を寄せつけず徹頭徹尾他領進擊、戰場を敵地に索むる主義なれば、甲斐一國には一壘一城、一壕の防備施設なく、只だ居城代りに數棟の館を設けしに過ぎず、首將信玄の自信確乎たるところは、今日戰鬪指揮の原則として、「攻擊は敵を壓倒殲滅する爲唯一の手段なり」(作令綱領一)と敎へられてある攻擊斷行方針と全く合致する所で、大に敬服するが、さてこの自信は、部下軍隊の精練にして必勝の信念堅く、攻擊精神充實しあることを知ればこそである。

されば「不動如山、疾如風」の指揮統帥は、信玄獨特の疾風迅雷的勝道であつたのである。

然るに信玄歿後、四隣の情勢は築城の止むなきに至り、地を韮崎の西側中田七里岩山にトし、武田軍の本居城を築きて、國防の核心となし名づけて新府の城とした。

斯の如く父祖傳統の作戰方針を、變へねばならぬやうになつた素因こそ、積極進取の攻勢に自信なく守勢、退嬰により現狀を維持せんとする消極意識の擡頭したる爲で、軈て武田軍滅亡の衰徵であることを窺はしめた。

織、德聯合軍の武田軍攻略の動機

一、天正十年二月木曾義昌(義昌は木曾福島城に在り其の室は信玄の女)勝賴と不和を生じ、密に款を織田信長に通じ、勝賴討伐の好期なることを勸告し、自ら其の嚮導たらんことを請ふ。勝賴之を偵知し大に怒り直に義昌征討の師を起さんとす、部將阿部忠高意見を具申して曰く、木曾福島城は天嶮にして力攻困難なり、而も時嚴寒積雪兵を進むる時にあらず宜く他の方策を立つるにしかずと、勝賴肯かず、卽時武田信豐に命じ其の弟二科信豐と共に兵五千を率ゐて急遽出動せしむ。

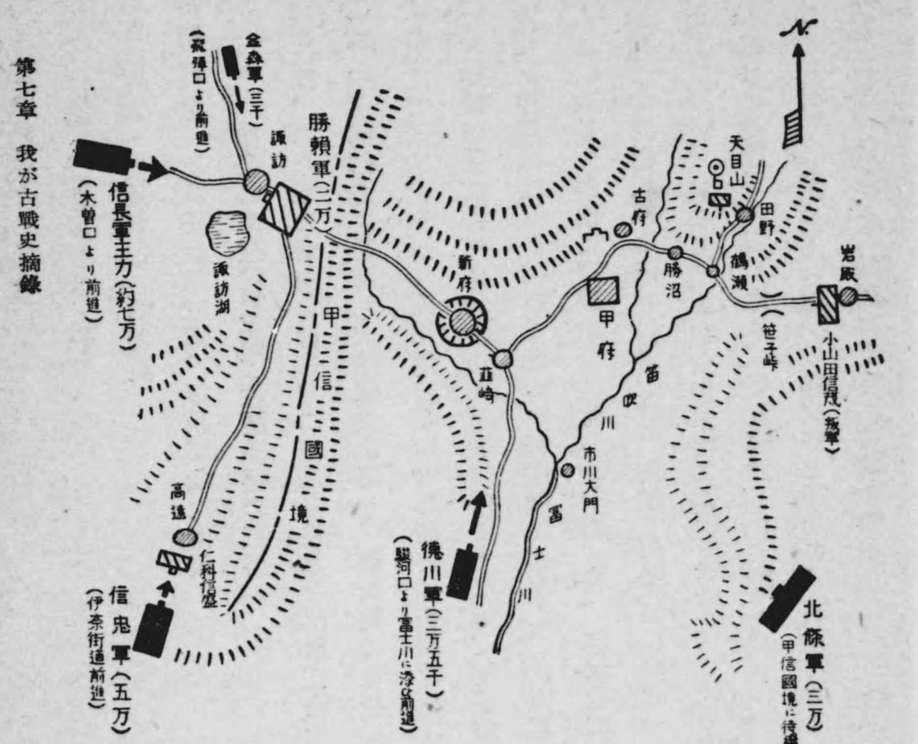
義昌聞いて急に防備を整へ、鳥居峠を中心に附近一帶の山地を扼し、第一線に銃手を配し、歩隊を其の後に備へ、一擧に甲軍を殲滅せんとす。信豐の指揮する甲軍は、時恰も嚴冬飛雪と寒氣に惱まされ鳥居峠の麓に殺到すれば、待ち構へたる木曾軍、山上陣地より釣瓶擊ちに射擊を開始し、甲軍忽ち算を亂して退き、信豐等叱咤激勵するも及ばず。木曾軍の精鋭其の機に乘じ、奮然として突入逆襲す奮戰縱横、甲斐軍全く散亂、跡部、小山田左京等を始め五百七十餘の死屍を殘して洗馬の庄に退く、又右縱隊たりし仁科信盛の軍は積雪深くして進むを得ず、これ又退いて育良の庄に陣す。勝頼、鳥居峠の敗報を聞き、大に怒り、自ら歩、騎二萬の大軍を率ゐて進んで諏訪に陣す。こゝに於て義昌急を信長に報じ、且曰く勝頼を斃すは此の一擧にあり速かに出動を懇望する旨を以てす。

聯合軍の作戰と出動態勢

一、安土城主織田信長は、豫てより濱松城主德川家康、小田原城主北條氏政等と聯合を策し、好機の到來を待ちありしに、木曾の報を得て宿志を達するは當にこの時にありと、直ちに武田軍を擊滅すべき作戰遂行の爲め、左の攻擊部署を命ず

1 伊奈口縱隊　長子信忠軍兵力五萬餘

2 駿河口縱隊　德川家康軍三萬五千



3 飛彈口縱隊　金森長迫軍三千
4 木曾口縱隊　信長軍主力約七萬
5 牽制部隊　北條氏政軍三萬、甲相國境に待機

伊奈口縱隊（信忠軍）戰鬪經過の概要

一、織田信長は、二月五日安土を發し、二月八日岐阜を出發、路を三河にとり擧母―足助を經て伊奈街道に出で、南部信濃に進入し、瀧澤城を略し、飯田城に保科正俊父子を下すに及び、附近の城塞悉く風を望んで潰ゆ、やがて武田領の潰走せし諸將は皆高遠城に集まる。

高遠城は、勝頼の弟仁科信盛及小山田昌辰の守る所なり、信盛時に年十九勇猛父信玄に類す。使を諏訪に遣し兄勝頼に献策して曰く速かに高遠城に進出し、武田軍の主力を以て信長軍が、各縱隊に分離しあるに乘じ、各個に擊破するは此の時であると、勝頼逡巡して決せず、空しく軍議に時を費すこと數日、此間信忠軍は破竹の勢を以て前進し高遠城に迫る。信盛決然として城を守り、屢々攻擊軍を討ちて退け、機を見て出擊信忠軍に攻擊を決行し、決定的打擊を與へんとす意氣頗る旺なり、而も城兵總數僅かに三千餘人、勇氣凛然として戰ふ。

信忠軍は、三月一日を以て高遠城の總攻擊を開始す、卽ち追手口より水野忠重軍兵力七千、東口より河尻、毛利等一萬餘人、降鬪將小笠原信嶺を嚮導とし、拂曉より一齊に攻擊を開始す、信盛以下必死の防戰も衆寡敵せず、遂に城將屠腹し、將兵之に殉じて斃れしもの二千五百八十餘人、殆んど全軍全滅何れも城を枕に其の運命を共にし甲軍最後の意氣を示したるも城遂に陷る。信忠軍の戰死二千七百餘人に及びたるを見ても如何に戰鬪の激烈なりしかを窺知するに足る。

駿河口縱隊（家康軍）の戰鬪概要

一、家康、織田軍に策應して駿河に進入するや、兵を分ちて遠目、鞠子城を攻略せしめ、更に久能城を降し勢威甚だ振ふ。江尻の守將穴山梅雪（信玄の姉婿）勝頼と隙ありて不和なりしかば、戰はずして家康に降り、之を先導として市川より富士川に沿ひ甲斐に進軍す、沿道風を望んで降り又抵抗するものなし。

勝頼軍主力の行動

一、織、德聯合軍は數縱隊となり前進中なるを知れる、勝頼軍としては信盛の意見具申の如く、聯合軍の各個分進に乘じ、山地帶の交通不便、協同困難なるに乘じ、各個擊破の處置を最上の良策である。而も、主力軍の位置する諏訪は、何れの方面に進出するも其の行動容易なるにも拘はらず、首將勝頼遲疑して決せず、高遠城全く重圍に陷り將に陷らんとし、信長軍の主力今や眼前に迫り、家康軍近く甲斐平地に進入するを知るや、倉惶として一戰を交ゆることなく新府城に退却す。時に新府城壁の防備完からず、將兵又漸く風を望んで散ずるに、勝頼策の出づるところを知らず、遂に本

城を解放し、他に據り最後の一戰を試みんとす。勝頼の嫡子信勝年十六、英邁豪毅なり、斷じて其の不可なるを主張するも、嬖臣等の勸告と宿將小山田信茂の甘言に乘り、忠誠なる眞田昌幸の献策を卻け、信長軍の旗幟だに見えざるに、早くも勝頼以下一族は古府の館に至るも、これ又何等防守の設備なし、勝頼遂に萬策盡きて小山田信茂の居城岩殿に籠城せんとせしが、小山田の反意により、已むなく天目山に據り最後の一戰をなすに決す。隨ふもの土屋昌恒、秋山光次等僅かに四十三人他は悉く遁亡す、而も民心到る處離反し、土人竹槍を擬して一行を拒ぐ、辛じて笛吹川に添ひ山路を辿りつゝ田野に入る時に三月十日なり。

勝頼一族天目山に滅亡す

一、山雲山を覆ひ、夜色暗慘たる山里の茅屋に、勝頼主從四十餘人只だ潛然として互に身をいたわりつゝ佇む、折しも一武者來りて勝頼に謁を請ふ、これぞ小宮山友信にして、曩に二嬖臣を除かんとし勝頼を諫め終に繼せられ野にありしもの、勝頼喜びこの悲境にある時獨り臣節武道を重んじ來りたるこそ神妙なれと、涙泫然として手をとれば友信はら〳〵と涙を流し、君の武運も最早末なるか、いで御最後を見守らんと。

勝頼使を天目山に遣し山僧の來援を求め、自ら田野に留りて天の明くるを待つ。

一隊の人馬忽然として山下より押寄す、これぞ信忠の先鋒隊のもの、勝頼の從者等拒かんとするも疲勞困憊して能はず、勝頼新館の御料人(信玄の娘信忠の許嫁せるもの)及び夫人(北條の妹)等を遁がさんとせしも聽かず、更に長子信勝をして一時遁がして再擧をなさしめんとせしも、これ又聽かず、遂に父子眷族共に死せんと信勝に擐甲の禮を行ひ、信忠軍の先鋒隊と力戰奮鬪、土屋惣藏、小宮山友信等細徑に立ちて戰ひ、勝頼、信勝刀を拔き鎗を揮つて戰ふ。此時山後俄かに銃聲起る、これぞ僧兵の叛きて襲ひ來りしなり、夫人泰然として運命の窮るを知り先づ自刄し侍女十六人皆自害す。

勝頼又石に腰かけ鎧を脱ぎて屠腹、信勝又死す、最後の忠臣悉く死しこゝに一族皆亡ぶ、織田軍の將士敵を殲したるも何人たるを知らず獲る所の首級を悉く溝に棄つ、住民の涙を流すを見て初めて首將勝頼たることを知る。

信長諏訪に至りて信忠の捷報を得、進んで古府に至り武田軍の降將にして當然勝頼と運命を共にすべきにかゝはらず、其の臣節を破り不義の餘命を得んとしたる、勝頼の祖叔父信光、叔父信綱、信龍、從弟信豐、小山田信茂(叛將)等を悉く天誅し武田一族は完全に亡びたのである。

第七節　長久手の奇襲戰

信雄と秀吉との關係

一、天正十年信長歿するや、秀吉の威嚴日に盛なり、而も彼の覇業の前途に横はる障碍は、實に信長の遺子北畠中將信雄と、東海の雄、家康の存在である。然れども秀吉は是等を打倒せんとするに何等の名義なきを遺憾とし、頻りに流言を放つて秀吉對信雄の不和を宣傳す偶々信雄其の老臣岡田、津川、淺井の三人竊かに秀吉に款を通ずるの意あるを聞き、大に怒り、天正十二年三月、上巳の祝儀に事よせ三人を誘ひ欺して之を誅す。こゝに於てか秀吉は信雄の亂逆行爲を憎み、檄を發して諸將を動員す、信雄又援を家康に求む、之に秀吉軍と織德聯合軍との對敵行動は開始さるゝに至る。

兩軍の情勢

一、當時秀吉の勢力は、近畿を中心とし中山道、北陸、山陽、山陰道の一部約二十四州に跨り、其所領約六百五十萬石、兵數優に十五、六萬を數ふ。

之に對し聯合軍は、信雄の所領尾張の全部、伊賀、伊勢の一部約百萬石、兵力約二萬六千、家康は、參、遠、駿、甲、信の一部約百四十萬石、兵力約三萬五千、合して約六萬。

秀吉軍に比すれば、兵力比率三分の一に過ぎざるも、聯合軍は大義名分を振り翳ざし且家康麾下の將士は、君家の浮沈此一戰に在りとし、自家の存亡安危に係る一大危機たる自覺による必死の意氣と志氣旺溢せる軍隊たることは、慥かに秀吉軍に精神的に優れたる强味があつた。

聯合軍の作戰方針

一、家康は三月十三日夜半清洲に到著し、信雄と軍議を開き、速かに木曾川左岸地區を確保し、秀吉軍の渡河に乘じ半途に之を討たんとせしに、秀吉軍の先鋒隊池田信輝軍已に犬山城（木曾川左岸にある要衝）を奪取し、木曾川左岸に前進據點を獲得せるを偵知し、家康は速かに小牧山を占據するの急務なるを痛感し、翌十四日未明部將酒井忠次を先發せしむれば、池田軍早くも小牧山附近に進出し、火を各村落に放ち濛々たる黑煙天に立ちこむるを望みしも、酒井部隊は鋭意小牧山を占領す、家康之の狀況に於て小牧山を確保するの困難なるを知ると雖も、飽くまで同地を確保し堅固に陣地を構成し以て清洲城を保持するに決し直ちに本陣を小牧山に進む。

秀吉軍の作戰方針

一、秀吉軍の作戰計畫は、羽柴秀長を長とし蒲生氏鄕等を附し一部を以て伊勢北部に作戰せしめ、信雄の領地を攻略せしめ、軍主力は中山道を東進し、美濃街道を經て木曾川下流、起附近にて渡河し一擧に清洲城に迫り決戰を企圖せんとしたが、三月十三日池田軍犬山城を占據したる捷報に接し、秀吉は急に方針を改め、直ちに軍主力を尾張北部より池田軍の掩護の下に渡河し、伊勢方面軍と策應し一擧に聯合軍を粉碎するに決す。

秀吉軍主力の行動

一、池田信輝犬山城占據に引き續き、其の女婿森武藏守長可は兵三千を率ゐて羽黑村附近に進出し、

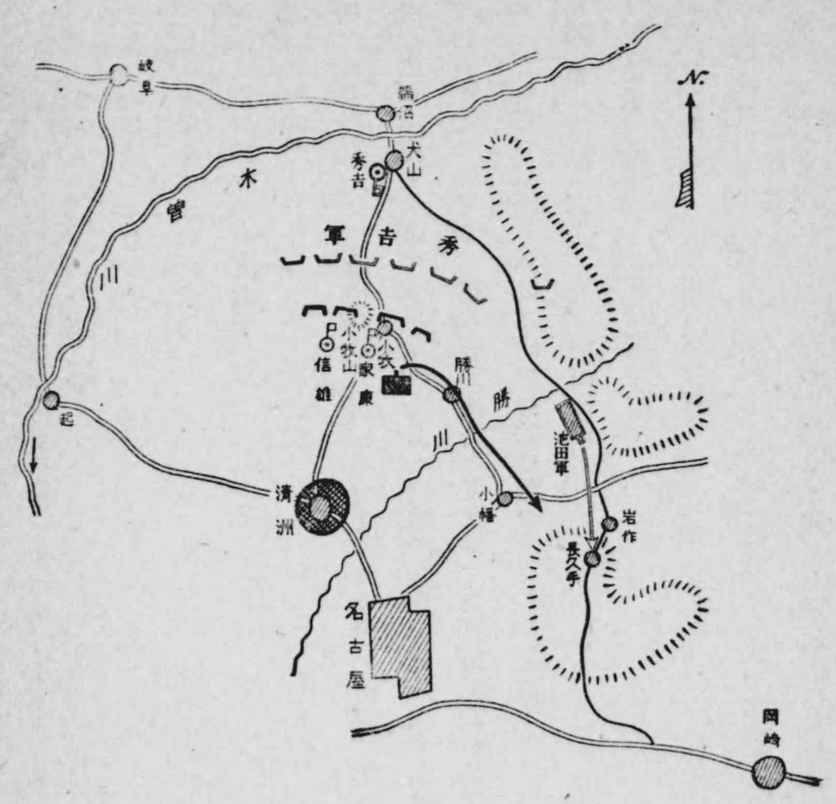
小牧山要地を奪取せんと企てしも、既に聯合軍の先鋒は、該地に着到しありたるを、其の友軍は同山南側落合郷に集結しありし爲、森軍と酒井軍は、要點爭奪に火花を散らし大に戰ひしも先制の利を獲たる酒井軍の爲に森軍遂に敗退して目的を達し得ず。

當時秀吉は尙ほ大坂にあり、羽黑の敗報を聞き、直ちに主力軍の出動を命じ三月二十一日兵力十二萬五千、十數梯團に分ち進發、美濃路に入り二十六日鵜沼(犬山城の對岸)より木曾川を渡河し犬山城に入る。狀況を觀望し、地形を偵察したる後、まづ小牧山に對し向城を築くに決し、其の東方に二重の空壕を鑿ち、內久保山、田中、小松、久保山、岩崎山、靑塚岩、樂田、小口等に砦を設け、東方及び北方より小牧山を包圍するの態勢を整へ、兵十萬を配置す。

彼我兩軍の相對峙する距離遠きも六粁、近きは二粁にして呼べば互に應へんとす、かくて聯合軍は要地を占め、秀吉軍は絕對優勢なる兵力を以て包圍し之を壓倒せんとす、兩軍の志氣大に昂るも敢へて動かず。

池田軍の三河岡崎城の襲擊企圖

一、四月四日池田信輝、家康軍の主力小牧山附近に集結し、其の領土三河の空虛なるを判斷し、後方攪亂あはよくば岡崎城を奪取する目的を以以て、自ら挺進隊となり潛行せんことを秀吉に献策す、秀吉容易に許さざりしも、遂に其の策を納れ、堀秀政を軍監とし、總指揮官として三好秀次を充て、



左の如き行軍部署を命じた。

第一隊　池田信輝麾下の一萬二千
第二隊　女婿森長可の五千
第三隊　軍監堀秀政の九千
第四隊　三好秀次の一萬六千
總兵力約四萬五千

二、四月六日秀吉俄かに小牧山陣地に對し正面より總攻擊を命ず。此の機を利用し、池田軍は行軍序列に從ひ潛に山道を索めて進發す。七日十時頃物狂坂を越へ、大草村—關白村—篠木—柏井道を經て同夜柏井附近に到着す、明八日朝出發と宣傳し、急に其夜二十時(午後十時)頃、非常呼集を行ひ、左の如く三縱隊に部署し岡崎に向ひ行動を開始す。

左縱隊(第一、第二隊)　長、池田信輝
中央縱隊(第三隊)　長、堀秀政
右縱隊(第四隊)　長、三好秀次

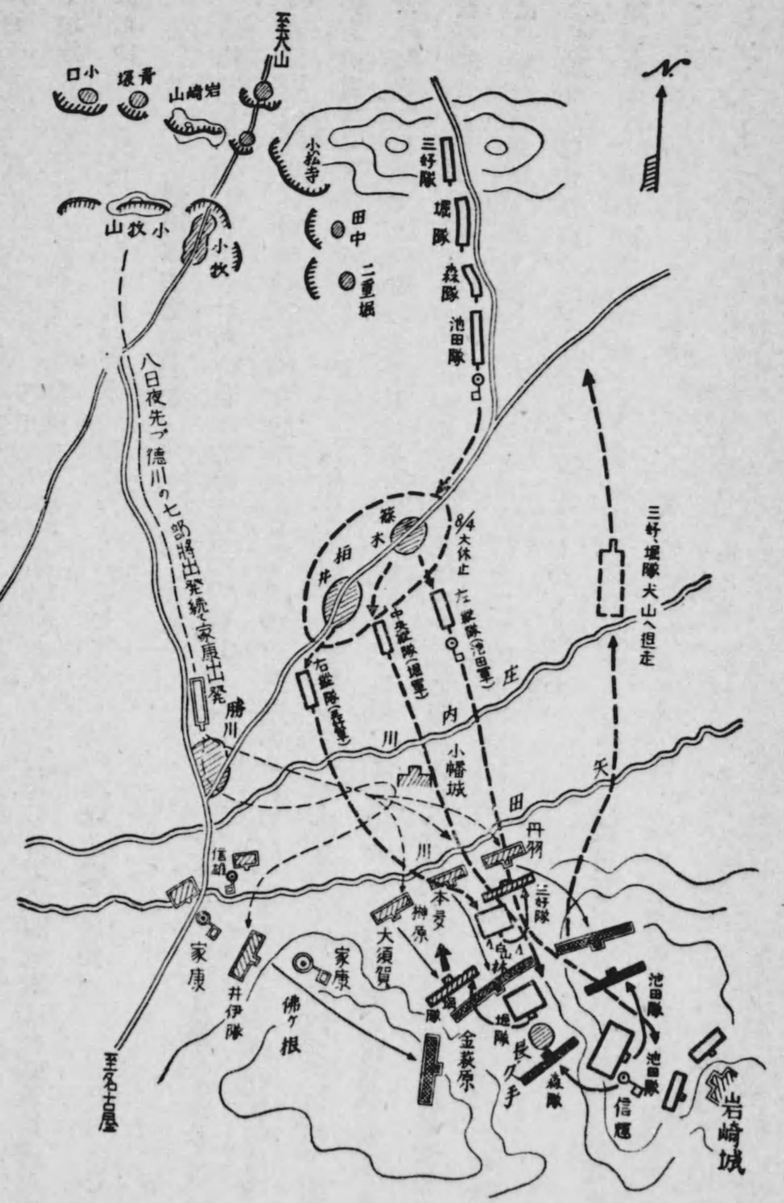
然るに志段味村に至り、道路の關係上、再び一縱隊となり、印場—新居—矢田川を渡河—長久手道を經て九日未明岩崎城に迫る。城將丹羽氏重(城主丹羽氏次は家康に屬して小牧の陣中にあり)以下

二百三十九人能く防げども、池田軍の先鋒伊木、片桐等の四千の攻擊に敵ひ難く、氏重以下戰死して城遂に陷る時に六時なり、信輝は、手始めよしと喜び勇み進軍す、此の間堀軍は金萩原に三好軍は白山林に共に、晝夜不眠の行軍に疲れたる人馬を休めて朝の兵糧を喫し居た。

德川軍主力の行動

一、篠木村住民四月七日の十六時頃小牧山家康の本營に、秀吉軍の一部隊來著して宿營する旨を告げ、又森長可の陣中に潛め置きし伊賀忍びの者より同樣の注進ありければ、家康さては敵の目的は我が後方攪亂するにあるを斷じ、斷乎として此の別動隊を擊滅すべく決意し小牧には酒井、石川、本多等の部將に兵五千と信雄の兵千五百を以て防備に任ぜしめ、水野、大須賀、榊原、岡部、本多(康)松平等に兵四千五百を指揮せしめ、岩崎城主丹羽氏次を嚮導とし、同夜十九時電擊的に出發せしむ、この隊は勝川町を經て潛行し庄内川を渡り二十二時頃小幡城に達したる頃、池田軍は已に三縱隊となり肅々として各宿營地を出發夜行軍をなしつゝあった。

續て家康は、井伊直政を先鋒として甲州流の赤備へ千八百餘人に德川麾下千二百を加へ、信雄と共に二十時小牧を發し夜半小幡城へ入るや、先發したる諸將は、今や攻擊部署を整へ將に出發せんとしつゝあるを知る。德川軍の志氣衝天の概あるも、何れも轡を結び、差物を卷き敵に知られじと密に機の熟するを待つ。



猪子石の朝合戰

一、德川軍の先遣隊は九日二時、夜暗を利用し行動を開始し、大須賀、水野隊は敵の右側に近接し、榊原隊は敵の背後に迂回し、天明を待ち、ひし〳〵と猪子石方面に肉迫す。

此時秀次軍は、白山林にありて朝食を喫しありしが、不圖小幡方面を望めば、七、八百の敵影朝もやの中に動くと見る間に、轟然たる銃聲忽ち我が身邊をかすめ、源氏車(榊原)、永樂錢(水野)、立葵(本多)の旗印を押立てたる諸部隊は、驀然に秀次軍に突進し來る。秀次の部將穗高山城、岡本等直ちに應戰奮鬪するも、忽ちにして秀次の本陣散々に追ひ崩されて四散し始む、堀秀政この急報を受け憤然として秀次軍を救援せんとするも、既に混亂狀態に陷り其の主力は長久手方面に、一部は岩作方面へと走る、秀次敗走兵を集め細ヶ根高地に據り拒ぎ戰ふも又及ばず、遂に馬に離れ徒步にて退く。

德川軍の先遣隊、堀隊に逆擊されて敗退す

一、堀秀政は秀次の急報に依り、急ぎ部下諸隊に方向轉換を命じ長久手に前進し檜ヶ根の高地に展開して待つ。

德川軍は勝に乘じ、大須賀、榊原の二隊先きを爭ひて進み來る。

秀政手兵三千を以て追擊し來る敵中に突入すれば、秀次隊の敗兵も之に加はり奮戰す、先頭に奮進

中なりし本多康重身に七瘡を被りて追ひ返され、こゝに勝敗忽ち地をかへ、德川軍はしどろもどろになりて敗退を始む、池田信輝この飛報を得て森隊と共に、直ちに引返し、秀次も備へを立直して全軍鼓躁して德川軍を擊滅せんと猛進す。

長久手の決戰

一、家康は信雄と共に九日二時、井伊直政隊を先鋒として小幡城を出で色ヶ根に來り白山林に秀次軍を破りたる捷報を聞き、間もなく堀秀政の逆擊を受け、味方散々に敗走しつゝあるを知るも、家康悠然として騷がず、さらば蒐れと自ら三千を直轄とし敵の右翼に又井伊隊三千三百を以て左翼に展開し、信雄軍を豫備として中央に控へて前進す、池田信輝、森長可等反轉して前山に至れば、家康の金扇の馬標は、既に眼前に迫る。森隊は直ちに岐阜嶽に展開し、池田隊又其の右翼に展開して戰線に加入し、此の兩軍主力は相對峙し、將に一大決戰は開始されんとす時に九時なり。

戰機忽ち動き、兩軍一齊に射擊を開始す、池田隊は德川軍の左翼を包圍せんとし其の子、之助遮二無二突進し却て德川軍の爲重圍に陷り、森隊は奮進して家康の本隊に殺到す、大將森長可決死の覺悟を以て、驀然に家康の旗本に斬り込まんとすれば、家康こゝぞと許り、豫て備へ置きし狙擊隊に一令すれば、杉山銃手狙ひ誤たず長可の眉間を擊つ、さしもの鬼武藏も馬より眞倒さまに落ちて戰死す。大將斃れ其の上井伊隊に左側背を衝かれたる森隊は、逐次敗退す、信雄の豫備隊三千新に戰線に加入し森隊に尾擊して信輝の本隊に迫る、戰鬪今や酣なり、信輝猛然として部下を激勵すれども部將相次で斃れ又は傷き、生き殘りのもの僅かに百五十餘人、只だ最後迄奮戰したる永井傳八郎又討たれこゝに信輝軍は總敗軍となり、信輝の一子之助も又戰死す其の弟輝政奮然として突入せんとすれど從者に遮られて果たさず（これぞ後の岡山城主池田家の祖なり）

大將信輝遂に起つ能はざるを知り從容として自刄す。

秀次、秀政は敗軍を纏め、間道を經て犬山に潛行す。

此戰鬪に於て池田軍の戰死二千五百餘人、聯合軍五百九十餘人、かくて家康は信雄と共に、直ちに兵を收め其の日の中に小幡城に入る。

秀吉、池田軍の敗報を聞き奮然として出擊す

一、池田軍全滅の敗報、樂田にありし秀吉の許に達するや、彼は急遽非常呼集を行ひ、早貝を吹き立てさせ總兵力數萬を十六段に構へ、威風堂々長久手に向ひ急進を始む。

小牧山の守將本多忠勝之を見て大に驚き、すは德川軍の一大事ぞと部將石川康通等僅かに八百餘人を以て進發し、秀吉の大軍を監視しつゝ庄内川を距て並行して進む、其の間僅かに四、五百米に過ぎず忠勝屢々銃火を發して挑戰すれども、秀吉其の勇武忠誠を賞しつゝ敢て之に應戰せしめず、只だ一意龍泉寺（小幡城の北側）に至りし時、家康已に小幡城に入れりと聞き、秀吉憤れども及ばず、

翌朝斥候を放ち偵知せしめしに城中寂として已に人無し、疾きこと風の如し、秀吉、如何にも家康の行動機敏にして機を見るの速きに感じ、麾下數萬の軍隊を整々として再び舊陣地に歸還せしめたり。

本戰鬪の兩軍に與へし影響

一、本戰鬪は單に秀吉軍の一支隊と、德川軍主力の決戰にして結果に於て、秀吉軍は勢力上何等大なる打擊にあらざるも、池田信輝以下の勇將を失ひたる士氣上の損失は、却て德川軍の志氣を高揚せしめたるに比し甚大なる打擊と謂はざるを得ぬ。

信輝の三河侵襲計畫は、彼我兩畫對峙する狀況下に於ては、全く機宜に適したる適切なる策案なりと云ふべきも、其の編成統一を缺き確たる總指揮官なく、且此の種の行動は極力其の企圖を秘匿し敏速果敢を必要とするに係らず、途中に無爲の時を費し、且沿道鄕民の敵方に好意を持つもの多きに對し、特に大なる注意を拂はざりし結果、防諜の手段を缺き、早期に我が企圖は暴露した。戰鬪開始後は全く協同一致の精神を缺き、各個に對戰し、殊に秀次軍愈々危きに際し堀秀政は、信輝の招致を聞かず小牧方面に引還したるが如きは、畢竟池田軍の總敗軍となつた所以であらう。

かくて常勝軍秀吉も、形而上下に多大の損失をなしたるは明白にして遂に小牧附近の戰鬪は、決戰を爲さずして中止し、政略的交渉により解決せしむるの已むなきに至つたのであらう。

第八節　伏見桃山城鳥居元忠の防守戰（慶長五年七月）

一、伏見桃山城の價値

伏見城は京都、大坂の中間に位し豐臣秀吉が征明の大軍を渡韓せしめ一擧朝鮮を席捲して將に大明を征伏せんとする大作戰に活躍しつゝありし文綠三年一月六日に愈々其造營を創め天下の力を擧げて一氣呵成に此大工事を成就せしめんと佐久間河內守、瀧川豐前守等六人を奉行に任じ人夫土工凡そ二十五萬人を集め秀吉自ら總監督をなし豪壯華麗莊嚴眞に人目を驚かす許りの城郭と邸宅とを經始し晝夜兼行諸侯の疲弊も省みず湟を浚はせ石壁を築き居館を建てしめた。

抑々我邦從來の城は單に險要の地に據りて簡單に其壘柵を構へたものに過ぎざりしが鐵砲の輸入以來攻守共に其戰法に一大變革を來し從て城も砲火に對し容易に破壞し得ざる石垣と土塀とによりて造られ同時に守城軍の射擊設備が銃眼、砲坐となつて現はれ他面城主の常住すべき居宅に變化した大坂城を始めとして此時代に建築せられた城は其の趣が變り殊に朝鮮役に於て諸將の各種攻防戰の體驗は築城術に長足の進步をなし諸大名が秀吉の例に則り其領內に分相應の城を築き今日尙ほ嚴存しある大部の城は何れも天正九年より文綠年間又は慶長の初年頃にして姫路城、廣島城、明石城、松本城、金澤、若松の諸城熊本城の如きも淸正慶長六年八月鍬初地形引をなし落成は十二年である。

何れも堂々たる天主閣を有し一種の展望臺たり又城主の總司令部となりたるも要は一面一大廣告塔ともなりしならん。

かくて伏見城は東南一帶に宇治川を控へ東北に山を帶び本丸の外に西丸、三之丸、松丸、名古屋丸及び治部少輔丸あり、當時としては最新式の要害最も堅固にして其邸宅は豪莊雄大世界的奇傑秀吉が嚴然として諸侯を其膝下に屈伏せしめ天下の風雲を叱咤するに適はしき偉麗なる一大城郭は文祿三年十二月には完成したのである。

一、徳川家康の會津東征と伏見城の守備

慶長五年六月會津城主上杉景勝、石田三成と通諜し愈々家康討伐の軍を起すや其主力を會津領南側白河（小峰）附近に集結し一部隊をして下野に進入せしめ景勝は兵八千を率ゐて長沼（白河北方約十二粁）に位置し極力城砦を修覆し家康軍の來着を俟ち一擧に勝敗を決せんとす。

他面大坂城を中心とする石田三成一黨の打倒家康の企畫は着々進捗し輝元を盟主とし秀家以下近畿中國の諸大名之れに參畫し今や其時期を待つのみであつた。

家康此情勢に對し沈思熟慮早晩我が腹背に敵を引受くべきを覺悟し先づ現實に對敵行動をなしたる上杉軍を討伐すべく會津に向はんとす。

此時一大問題は徳川軍として近畿地方に於ける一據點の獲得保持にあつた。伏見城は京、坂兩地の咽喉を扼し戰、政何れの方面よりするも緊要なる地點たるは言ふ迄もない。是に於て家康一度東征の途に上らば直に四面强大なる敵より攻略せらるべきを顧慮し特に老功忠烈の家臣鳥居元忠を總司令とし内藤家長其子元長、松平家忠、松平近正等の腹臣を副とし懇々として其の任務を示す元忠等其の責任の重且大なるを直感し武士の本分として一死以て奉公の分を守るべく誓つたのである。

一、伏見城の防禦配備

若狹小濱の城主木下勝俊は特に家康の命に依り松丸を守備する任を受く。果せる哉七月十八日大坂方の奉行增田、長束等は使を遣はし毛利輝元の命を以て伏見城を開城すべきを以てす鳥居元忠怒り之を峻拒し使者を追拂ひ、卽刻關東にある家康に特報し大坂軍の企畫第一歩を露したるを覺知し愈々孤軍防守の方策を決定し、翌十九日元忠自ら城外を視察檢踏して防支に障りある人家を燒き左の如く防禦配備を定む。

本　丸　鳥居元忠
西　丸　内藤家長、内藤元長、佐野綱正
三之丸　松平家忠、松平近正
治部丸　駒井直方
名古屋丸　甲賀作左衞門、岩間光春

總兵力千八百餘人

松　丸　深尾清十郎
太鼓丸　上林竹庵（宇治の茶商）

木下勝俊は元忠と議合はざる故を以て去りて京に至り伯母高臺院（秀吉の正室）を守護す島津義弘、小早川秀秋も共に伏見城を守らんとせしも元忠は頑として受付けず一意純德川軍によりて固守を決意し防戰の準備を急ぐ。

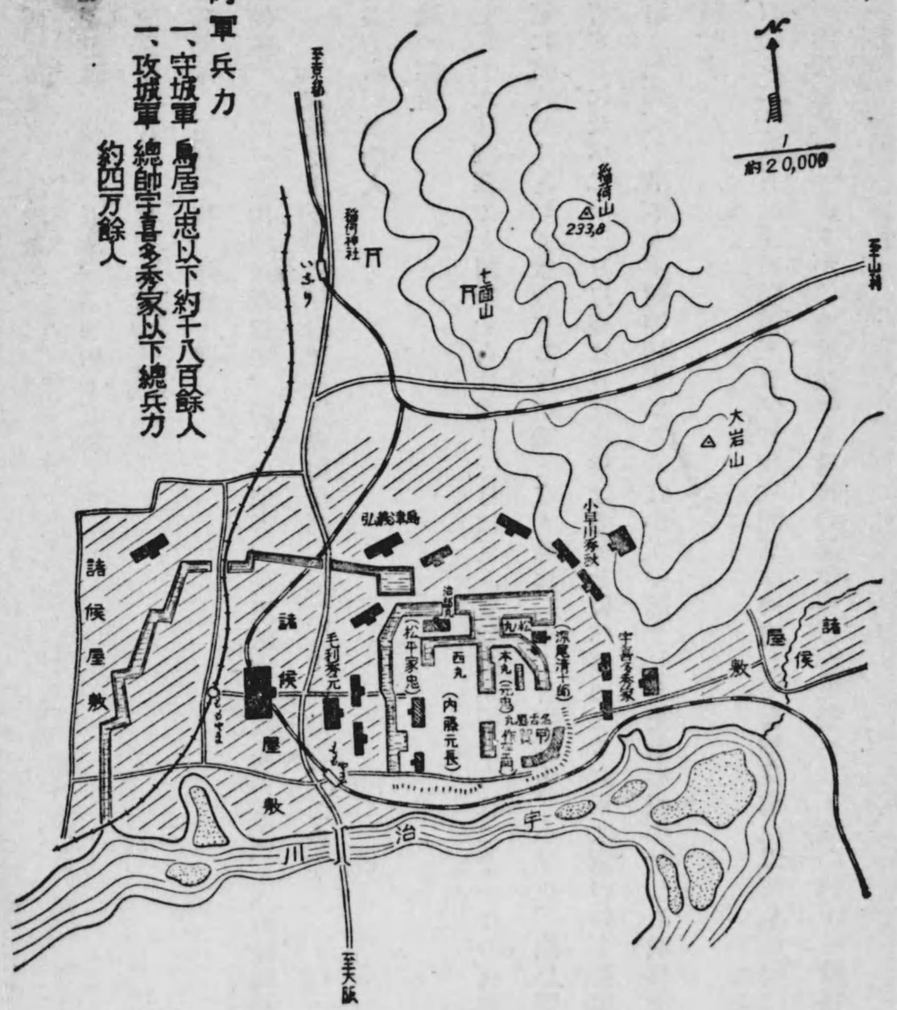
一、大坂軍の攻擊部署

例へ最新式の築城とは云へ劣弱なる兵力に加へて全くの孤立無援の情勢にある伏見城は關ヶ原戰の序幕として大坂軍は鎧袖一蹴元忠等の首級を獲て戰陣の血祭にせんとする意氣を以て十九日夕刻には既に續々宇治川を渡り城下に迫り二十日、二十一日は各所に銃戰は開始せられ二十一日の二十時頃には攻擊最も猛烈を極め伏見籠城軍は必死を期し防守に努む。

攻擊軍は二十二日宇喜多秀家、小早川秀秋及び鍋島勝茂等來着するに及び概ね左の攻擊部署を定む。

東側地區攻圍軍指揮官　宇喜多秀家
配屬部隊　鍋島、長曾我部、小西、毛利秀包、安國寺、長東等約十五將

東北地區攻圍軍指揮官　小早川秀秋
配屬部隊　福原、南條、秋月外約十一將



兩軍兵力
一、守城軍　鳥居元忠以下約千八百餘人
一、攻城軍　總帥宇喜多秀家以下總兵力約四万餘人

西北地區指揮官　島津義弘

配屬部隊　相良、五島、宗等約十五將

西方地區指揮官　毛利秀元（七月二十六日以後瀧田に移る）

配屬部隊　毛利一族、外約十將

總豫備隊　石田三成代理高野越中、同大山伯耆、長束正家代理伴五兵衛、大坂城組頭堀田勝嘉、銃隊長木下周防守以下外に織田信高（秀信の弟）同信吉、信貞等

總兵力約四萬餘人

一、攻防戰の經過

戰鬪は七月十九日薄暮より開始せられ連日三日に亘り射擊戰が續けられ二十一日の夜戰は攻者としては一氣に突入せんとして激烈なる攻防戰となり殊に二十二日宇喜多、小早川、鍋島等大坂軍の首腦部來着するに及び二十三日以後は更に攻擊は活氣を帶び優勢なる大軍は潮の如く驀地に突進して城壁に迫り喚聲天を破ぶり須彌坤軸もふるふばかりの凄まじき光景を現出せしも城兵能く應戰し頑として屈せず。

二十四日より二十八日に至る前後五日間日夜攻圍軍は肉迫して奮擊突進白刃相亂れ屍は積まれ血河流るゝの慘狀を呈す。さすがの堅城鐵壁も最後の運命來るかと覺へしも城の將士一致協力眞に死力を盡して奮戰し意氣益々旺なり。

七月二十九日石田三成佐和山城より來着し諸情報を聽き大坂軍の主力を以て此の一孤城を拔き得ざる事既に十日餘なるを知り大に諸將を督勵し一蹴粉碎を奬む此に於て各將は憤激して各々其部下を激勵し夜半一齊に各方面共總攻擊に移り攻圍軍の將士遮二無亂れ入り慘絶なる白兵戰は闇黑の各所に稻妻の如く電光石火の接戰となり叫喚の聲城の內外に湧く。

總豫備隊迄列を亂して競進し終夜銃聲喚聲天を破り必死の突擊四回に及ぶ。

城兵又縱橫無盡に奔馳して兵力の寡を補ひ危を救ひ急を援けて死力を竭して防支す。

一、東北竝に西北地區の激戰

八月一日夜半〇時東北地區攻擊正面にある松丸は炎々として火を發し附近一帶の戰場を照らし城將に一角壞れんとして悲壯の焰を噴くが如き觀を呈す。延ひて火は名古屋丸に移り黑煙天を覆ふこれぞ松丸の守兵甲賀の鄕士（所謂忍び者と稱して家康常に探偵に使用したる者にして其數約五、六十名）が長束正家の爲其妻子悉く捕へられ之を張付けにせんと擬し鄕士の知友をして箭文を以て城中に若し內通せば妻子を宥むるのみでなく厚賞を約す。此に於て鄕士山口宗助、堀十內等又箭文を以て內通を約し夜半同志四十人と共に放火し城壁を破壞する事凡そ五十間以て攻擊軍の侵入に便ならしめたのである。

長東の部兵火の擧がると共に勢を得て進擊し、指揮官小早川の手兵又續ひて突進す。城中の火勢益々烈しく從つて城兵混亂に陷るに乘じ寄せ手は愈々猛進す鍋島軍は直に追手の鐵門に迫り城兵槍及び薙刀にて防ぎしも鍋島軍火を放ちて城門を燒き喊聲を發して突入す。西北部隊に屬する相良軍又之に乘じて進入遂に東北地區攻圍隊は完全に松丸、名古屋丸を奪取せり。

小早川秀秋は一旦休戰を命じ人を城中に遣はし和を議せんとせしが城將鳥居元忠聽かず攻圍軍は再び攻擊を開始し城將松平近正、上林政重等花々しき最後を遂ぐ。

十時頃西北地區指揮官島津義弘は治部少輔丸に進擊す松平家忠は自ら槍を揮うて突戰し島津の部將別所下野と奮鬪し左肩を傷けたが攻圍軍群り來りて之を救ひ家忠は一旦之を擊退せしも衆寡敵せず悲憤の形想物凄く割腹して斃る從兵八百何れも格鬪して戰歿し遂に治部少輔丸陷る。

此れと殆んど同時に秀秋の部下は火箭を發して天守閣を燒く。

さすがの堅城、守るは忠烈無比の德川麾下の勇士も鄕士の內通より其の一角は破れ今や火は天守閣に及び城將相續いで戰歿し如何に勇あり義有りと雖又如何ともすべき策なし。鳥居の家臣等元忠に自殺を勸む元忠叱して之を退け直に起ちて手兵二百を率ゐ最後の一兵に至るまで奮戰すべき意氣を示して突出し攻者を擊退する事三回、元忠又身に數創を負ひ部下の兵亦過半を失ふて僅に戰ひ得るもの數十人のみ。

一、鳥居元忠の最後と伏見城の陷落

石田三成の代理高野越中寄せ手の擊退せらるゝを見て手兵を指揮し元忠の部隊を急に側面より擊つ元忠これが爲苦戰に陷り一旦退きて城內に入り彼我混戰亂鬪に陷りしも元忠辛じて之を退け更に出擊して攻者を苦しめ前後五回出擊して城兵殆んど戰歿して殘るもの僅に十餘人。

攻者は城中に充滿し手の下しようなく元忠本丸に入り石壇に倚り憩ひしが雜賀重朝槍を揮て之を刺さんとす元忠靜に名乘を揚げて遂に自盡し雜賀其首を收む。元忠の部下三百五十人此戰ひに悉く戰死し勇將の下眞に弱卒なしの實狀を示す。偉なる哉將士の情誼これこそ武將の鑑として萬古に輝き名を萬天に擧げたるものとこそ謂べけれ。

一、西地區方面の戰ひ

西丸の守將內藤家長力戰大に努めしも松丸燒け天守閣又火となり終に爲すべからざるを知り其の部將安藤定次をして其子元長と與に奮戰して敵を防支し退いて鐘樓に登り薪を積み從士原田に命じ關東に至り家康、秀忠及び其子政長に落城の狀況を具に報ぜしめ自殺す。元長十六の少年敵垣見一直と格鬪して之を斃し父と共に死せんとせしが火熾んにして近づけず腹を屠りて火中に飛び入つて死す定次等十六人又奮戰して之に死す。

かくして八月一日十五時頃伏見城は全く陷落し城兵將士千八百餘人殆んど悉く戰死す攻者の死傷約

三千人。

伏見城の孤軍能く大坂軍の大軍を引き受け前後約二週日寡兵を以て死守し衆敵を惱まし守城の將兵一致協力奮鬪これ努め甲賀の鄕士の變節叛謀により遂に城は陷りたりと雖、德川武士の全部は悉く忠節に殉じ枕を併べて戰場の露と消え其の任を盡くし殊に首將元忠が最後の一兵に至るまで徒らに退嬰死守を捨てゝ奮擊突進し城外に戰ひ從兵僅に十餘人に至りて天運盡き從容として自刄するの決意は眞に日本男子として其意氣の壯なる千古不易の英名を竹帛に垂るゝに絶大の價値ありと謂ふべし。關ヶ原の一戰德川氏に勝利を得せしめたる抑〻の一大原因はこゝに存するならんか。

昭和十七年十一月十五日印刷
昭和十七年十一月二十日發行

日本古來の兵法と現代戰奥付

新 定價 金壹圓四拾錢

著者　舟橋茂
東京市麹町區三番町十四番地

發行兼印刷者　横尾民藏
東京市牛込區市ヶ谷臺町二十二番地

印刷所　成武堂印刷所
印文會員番號八

發行所　成武堂
東京市麹町區三番町十四番地
電話九段(33)二八一五番
振替東京三〇七一三番
出文會員番號一一四・〇六五
出文教承認番號あ二四〇二五六

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

956
6